
身代わりとりっぷ

伊倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身代わりとりっぷ

【Nコード】

N30910

【作者名】

伊倉

【あらすじ】

古流剣術の後継者神凧大和と古い機械が大好きな神凧椿、双子の兄妹は異世界に召喚されてしまう。

異世界では研究中の転移魔法を使ったため行方知れずになったりりー王女を呼び戻そうとしていたのだが、王族の一人が勝手に未完成の召喚陣を起動したため二人が呼ばれたらしい。

おりしも四年に一度の祭りが近づいていた。この祭りで王族の女性が詠を捧げなければ魔界との扉が開いてしまう。

幸いもう一人の王族の女性がいるが、何者かが詠の邪魔をし、魔界

との扉をひらくようにしているようだ。
なぜかりりー王女に生き写しである椿を身代わりに仕立て犯人をい
ぶりだそうとする。

1 大和と椿（前書き）

すみません、作品中都合により暴言に近い発言がありますが、異世界才子ものを書く方を敵に回すつもりはまったくありません。作品の都合上なのです。

ひらに、ひらにお許しください。

1 大和と椿

鉄を仕込んで真剣と同じ重さにした木刀を神風大和はふっていた。今では廃れた古流剣術ではあるが、大和は嫌いではない。

広い道場で修練するのは大和だけだ。剣術とはいわば人を斬るための技術である。それが廃れるということは、時代が必要としてないからだ。人が人を殺す必要のない平和な世でゆっくりと衰退していくのは寂しいことだが、摂理でもある。

スポーツとしての剣道やスポーツチャンバラとして残るのがせいぜいだろう。

いくつかの型をさらい、一日の稽古を終える。ふと見ると、道場の片隅に百科事典を積んで読み漁っている妹がいた。

「こんなところでなにをしているんだ、椿」

「読書」

「……部屋で読めよ」

この妹は蒸気機関だのカメラの仕組みだの、古い機械が大好きだ。デジタルよりもクラシックなものに詳しい。いつか初期の自動車や蒸気機関車を再現したいとかほざいている。

女の子の夢ではない、と大和は思う。

黙っていれば、奇麗系の可愛い女の子なのに 二卵性の双生児にも関わらずそっくりの顔をしているというのは余談 妹の行く末が心配だった。

「いいじゃない。こんな広い道場一人で使っているんだもん。はい、タオル」

それでも気遣ってくれているらしい差し出されたタオルを手にとろうと大和が歩み寄る。タオルに手が触れたとき 二人の足元が輝いた。

「な、なにこれ！」

大和と椿、それぞれを中心に半径一メートルほどの輝くサークル。

ふちのほうになにやら細かい模様のようなもの

「椿！」

とっさに大和は椿の手をとった。

「兄さん！」

離れまいと椿も大和の手を握る。

そして光があたりを包み込んだ。

すべてを飲み込んだ光の闇がはれたとき、二人がいたのは道場ではなかった。石造りの部屋。床には焦げたような二人を中心に半径一メートルほどの円の黒い跡。椿の百科事典とタオルが落ちていた。周りには人が円を囲むように立っている。

「……ここ、どこ？」

椿が呆然と呟く。大和は黙ったまま辺りを見回し、自分達を囲んでいるのが男ばかりで、大半が武装しているのに気づいた。

しかもその姿はRPGに出てきそうな古い外国の兵士の姿だ。

「……」

異常だった。信じたくは無いが、安っぽいライトノベルの異世界おちのような状態だ。

(まさかそんな！)

武装していなかったでっけり肥えた中年らしき男が喚いた。

「……」

なんと言っているか全然分からなかった。

これはあれか、異世界おちか！ 異世界トリップなのか！！

男が喚いたのを皮切りに十何人かいた男達がしゃべり始めた。

「ねえ兄さん、あの人達なに言っているか分かる？」

「……いや」

「あのさ、この状況って異世界トリップというか、異世界落ちものっぽくない？」

「……言うな」

最初に喚いた男が椿の肩に手をかけた。

「な、なに！」

「ごめんなさい、なに言っているのか、全然分からないの！」
業を煮やしたのか椿のブラウスの合わせ目に手をかける。

「いや！ やめて」

「よせ！ 何をする！」

古今東西うら若き乙女の服に手をかける男に善人はいない。罰せられるにふさわしい行為である。大和は二人のあいだに割って入った。

男が何か叫び、大和を指差すと兵士が何人か剣を抜いた。幅広の剣のようだったが、切っ先というものがない。

大和は木刀を構える。一見普通の木刀だが、芯に鉄が入っている。そう簡単には折れないはずだ。まさか真剣と戦うことになるうとは思ってもいなかったが、椿を守らなければならぬ。

男達の態度から椿がひどい目にあわせられるのは目に見えていた。兵士の一人が雄叫びを上げながら剣をふりかぶり 大和は高速の突きをその喉にくれてやった。一人倒した。喉を押さえて悶絶しているが、死にはしないだろう。同じように剣を振りかぶった兵士に防具の隙間をつく突きを入れる。どうやら突きという概念が無いらしい。

周りがざわめいた。

「ディアボロ」

一番偉いらしい中年男が喚いた。

それまで傍観していた男が軽く肩をすくめ剣を抜いた。

おそらく一番の手誰だろう。縮れた黒髪を束ね、まばらな髭を顎に生やしている野性味の強い顔立ち。体格がよく、鍛えているのがよくわかる。

立ち会うだけで分かる 強い。どこまで対抗できるものか。

「男が力を込めたのが分かった　来る

「静寂を破る声に、兵士たちが慌てたようだった。見ると入り口のあたり、兵士の壁を新たな兵士が押しやり、茶色の髪の若い男が入ってきた。古風なローブは魔法使いのようだった。顔立ちは知的で整っている。」

大和達を見て　驚いたように悲鳴を上げて駆け寄り、床の焦げたようなサークルの前で膝き、泣き出した。

振り向いて肥えた中年男に何か怒鳴る。

若い男の方が立場が強いらしく、中年男はなにやら言い訳をしているっぽい。ただし言葉は全然分からない　気のせいか小さな火花が散っているような

改めて若い男は大和に向き直り　指輪のようなものはめた。

「わたしの言葉が分かりますか？　遠い異国から来たお方」

「日本語だ……」

「あなた、わたしたちの言葉が分かるの？　よかった、全然言葉が通じなくて困ってたの」

若い男はほっとしたような顔をした。

「よかった。？通訳する指輪の魔法？は有効なようです。どうぞこれをはめてください」

男は同じ指輪を二つ取り出した。ちよっと躊躇ったものの椿が受け取りひとつを自分の指に通し、大和にもうひとつを差し出した。

大和は構えをとき指輪を適当にはめた。

「これでいいのか」

髭の男が驚いたような顔をした。

「おいおい、急に言葉がわかるようになったぜ」

「これで意思の疎通ができますね。どうやら謝らなければならぬのはこちらの方。状況も分からないでしょうから説明もいたしません。まずは、話のできるところに参りましょう」

2 ティアボロの証言

召喚陣が眩い光を収め燃え尽きた。その中心には十五、六の男女二人が膝立ちでいる。

やはり失敗したか、とティアボロは思った。

王の大叔父ぐらいに当たるロジニア公が、勝手に起動させた魔方陣は、まだ未完成だった。そのことをここにいる全員が知っていたが、王族の権威を振りかざして動かさせたのだ。

黒髪、黒瞳はめずらしくも無いが、二人とも見たことも無い服装をしていた。傍らにはなぜか書物が積み上げられており、少年の方は武器らしき木の棒を持っている。

ああ、こりゃ責任問題だな、と人事のように思った。

ロジニア失脚しないかな。

したら嬉しいな。しっきゃく、しっきゃくと節をつけて心の中で思う。

「おまえ達はなにものだ！ なぜリリー様がいるべきところにいる！」

ロジニア公が喚いた。失敗したからに決まってんだろ？

「リリー様ではないぞ」

「失敗か」

「無理矢理未完成のものを動かしたからな」

兵士たちが騒ぐ、いまさらだ。

二人はなにやらこそそこそとしゃべっていたが、言葉が分からない。どうやらナリスの言っていたように異世界とやらに繋がっていたようだ。

「なにをしゃべっている！ 貴様ら敵国の間諜か！」

ロジニア公が少女のほうの肩をつかんで振り向かせた。その顔を見てティアボロも少し驚いた。

（リリー様に似てる？）

「む、どこかで見た顔だな。どこの国のものだ？ 素直に言わねば痛い目を見るぞ」

どこかって、この国だよ。髪型や服装はともかく、顔がリリー様に生き写しじゃねーか。肩までしかない袖とか、膝ぐらいまでしかない丈ってあり得ねえけど。

少女が何事か叫んだ。

「~~~~~」
やはり分からない。

「この！ 痛い目を見せてやるわ！」

ロジニア公が少女の服に手をかけた。

「~~~~~」
「~~~~~」

少年の方がかばうように割って入った。まあ、女が辱められそうなら当然の行動ではあるが、これだけの兵士に囲まれながら、なかなかの気概である。短く切られた髪など奇異だが、よく見れば男女の差があるもののよく似た顔をしている。血縁かなにかだろう。

「わしに逆らうか！ 衛兵、こやつを始末せい！」

兵士の何人かが剣を抜き少年に対峙した。とめようかとも思っただが、少年も持っていた棒を構えた。が、棒と剣では勝負は見えている。ただ、少年の構えは見たことが無いし、棒もどうやら意図的に形が整えられている。稽古の時に使う木の模造刀のようなものかもしれない。

ディアボロは少しだけ興味がわいた。

雄叫びをあげた兵士が切りかかり 少年はすべるような足取りで持っていた棒を喉に突き込むように前に出す。

ディアボロは目を見開いた。見たことも無い技だった。

一人が喉を押さえて悶絶し もう一人が防具の隙間を棒で突きこまれ、腹を押さえて倒れた。

間違はなく意図してやっている。

考えてみれば振りかぶるより直線的な動きの方が早い。理にかな

った攻撃である。足さばきも変わっている。

(異国の剣術か……)

面白いと思う。どのようなものか確かめてみたい。

「なにをしている！ ディアボロ、こやつを討ち取れ！」

指名されてディアボロは肩をすくめた。残念だと思う。見たところ相手は十五、六。まだ子供だ。このまま精進し大人になったらどれほどの腕になっただろう。異国の剣術といい、さぞ手こたえのある相手になっただろうに。いまここで倒してしまうのは、本当にもつたいない。

ディアボロは剣を抜いた。

少年も棒の先をディアボロに向けた。体の中心あたりに棒をまっすぐに構えディアボロを見据える。いい目だ。おそらくは実戦を体験したことも無いだろうに、こんな絶対的な危機に臆することなく立ち向かう。実に惜しい。

だが、負けてやるつもりなどディアボロには無かった。

「なにをしているのですか！ やめなさい！ わたしの研究室ですよ！」

この部屋の主宮廷魔術師のナリスの声が響いた。慌てて振り向くと兵士の人垣を押しやり部屋に入ってきたところだ。

ナリスが目を見開き二人の異邦人とその足元を見た。

「ああああ！ わ、わたしの召喚陣があああ！」

走りよって陣の状態を確かめ、絶望的な状態だったのかさめざめと泣き出した。

きつとロジニア公を睨み涙ながらに抗議した。

「ロジニア公！ これはいったいどういうことですか！」

「いや、その」

ばつが悪そうに顔を背ける。

「なぜ、わたしの召喚陣が崩壊しており、見知らぬ男女がいて、よりによって貴重な魔法の品があるわたしの研究室で立ち回りが行われているのですかー！」

回りの品物は壊していないはずだったが、怒りのオーラが目に見えるようだった。おさえきれない感情の発露が魔力となって火花を散らしている。

「いやあ、怒るよな。三ヶ月かけて調査研究した召喚陣がちょっと目をはなした隙におしゃかだ。

「ナリス殿、魔法が洩れてるぞ、おさえてくれ」

「ディアボロどの！ なにがあつたのか説明！」

びつと指差し指名されてしまったディアボロは仕方なく説明した。「あゝ、突然ロジニア公がやってこられて、召喚陣を起動させると強要なさいました。まだ未完成ですので、いま動かしたらどうなるか分からないと進言したんですが、王族の血に連なるものの権威を振りかざしまして起動させたと」

「とめなさい！」

「俺にどうしろと？ で、見事に失敗。関係ないこの二人を召喚しちまったようです」

「で、この高価で貴重な品物に囲まれたところで暴れているのはなぜですか？ こととしいによつては」

バチバチと火花と雷光が洩れ出る。魔力、洩れてますぜ。

「いやあ、宮仕えなもんで、お偉いさんに戦えと言われれば、やるしかないんで」

必殺責任転換。

「先に手を出したのは？」

「文字通りロジニア公です。婦女子の服に」

しれつとディアボロはこたえた。

ぎつとナリスがロジニア公を睨んだ。

「こ、こちらの質問に素直に答えぬやつらが悪いのじゃー！」

「ああ、どうやら言葉が通じないようですね。よつぽど異国からきたんですなあ」

ロジニア公の必死の言い訳を一言で叩き潰したディアボロだった。「王命によって造っていた召喚陣を壊した責任は後ほど。こちらの

お一人に償いをしなければなりません」

王命をわざと強調し、ナリスが召喚された二人に歩み寄って言った。

これでロジニア公が失脚すればいいな〜と思うディアボロだった。

2 ディアボロの証言（後書き）

一話と二話でひとつの話になります。とりあえずディアボロの体格のいい無精ひげのおっさんと思ってくださればよろしいかと思えます。

3 お約束の異世界召喚 副音声は困りもの

わりと小綺麗な部屋ではあるが、目の前に置かれたお茶らしきものに手をつける気も起きず大和と椿は椅子に座っていた。

「名乗りもせずに失礼しました。わたしの名はナリスと申します。宮廷に仕える魔法使いです」

やはり剣と魔法の世界らしい。

「あちらはロジニア公。彼があなた方をこちらに連れてきてしまった張本人です」

と肥えた中年男を紹介した。

「ち、張本人とは失礼な」

「お黙りなさい！ あなたが責任を取らずに誰が責任を取るのですか！ 召喚陣を壊してしまった責任も取ってもらいますよ。まずはかかった費用すべて賠償してもらいます。さらに、お二人の滞在にかかる費用と、新たな召喚陣の費用と、送り返すのに必要な転送陣にかかる研究費と必要経費もです。覚悟しておきなさい」

さーとロジニア公から血の気が引いた。かなりの金額らしい。

「というわけで、費用は公がすべて持ちますので、客人として滞在なさってください。勝手に呼びつけておいて刃物を向けるなど大変失礼なことをいたしました。あなた方には謝罪いたします。お許しください」

ナリスが一礼し、何かを期待するようにじっと見つめた。

「大和だ」

「わたしは椿よ」

「ヤマト殿にツバキ嬢ですか。よろしくお願いします」

その場には髭の男もいたのだが、ナリスが彼を紹介することは無かった。そういう立場の男らしい。

「まずは状況の説明ですね。わが国はロディシアと申します。クニア大陸の三大国のひとつと自負しております。あなた方には馴染み

のない国名でしょうね。おそらくあなた方はここではない異なる世界から来られたのでしょうか？」

「たぶん、そうだと思うわ。異世界ね」

「どうしてこのようなことになったのかというと、全てこちらの責任です。わたくしどもの国では近頃転移魔法が研究されており、まだまだ研究途中の技術ですが、さる事情で使わざるを得ない事態となりました」

ここでナリスは溜息をついた。

「わが国の王にはそれは美しい御歳十六の姫がおられますが、賊に襲われ転移魔法を使われたのです。これは二つの転移用の魔方陣を使い、魔法陣から魔方陣へ移動する安定したものだのですが、転移の瞬間賊が魔方陣を傷つけていたようで、もう一つの魔方陣に姫は移動できなかったのです。姫はいずこか転移されてしまいました。わたしは王命により姫を再召喚するための魔方陣を研究してしました。それが」

「わたし達を呼んじゃったのね？」

「はい。お詫びいたします」

大和にはちんぷんかんぷんだったが、なぜか椿は目をキラキラさせて会話に参加している。

「どうしてそんなことになっちゃったのかしら？」

「傷つけられた魔方陣の痕跡に従い調べて造った陣ですが、まだ未完成でした。調べていくうちにどうやら異なる世界に通じてしまった節があり、そちらの方も捜査中でいちおう繋げられるという程度だったのです。定着もしてないそれを勝手に稼動したもので、壊れてしまいました」

しくしくとナリスが泣いた。

「泣かないでナリスさん。失敗は成功の母よ。一度や二度の失敗でくじけていては、進歩はあり得ないわ。もう一度挑戦よ！」

思い当たることがたくさんある椿はナリスに同情的だった。この妹は研究という名の失敗を山ほど繰り返してきた。中には成功もある

るが、試して見なければ何も始まらないとは座右の銘である。

兄ちゃんはおまえの行く末が心配だよ。

「うう、ありがとうございます。いえいえ、王命ですので、姫がお帰りになるそのときまであきらめはしません。あなた方もきつと帰してみせます」

ここで大和は口を挟んだ。

「帰れるのか？」

「はい。どこから来たのかはいちおう分かっています。逆の転送陣が作れば帰してさし上げられるとは思いますが、作るのに時間がかかりますし、必要な材料がすぐにはそろいません。しばらく御滞在いただいしかありません」

「どのくらいかかるの？」

ナリスは少し考えるそぶりをみせた。

「材料がそろえば三ヶ月くらいで。それでも祭には間に合いませんが……」

「まつり？」

「四年に一度の祭だよ。王族の姫が巫女となって詠を捧げるんだ。

それが二カ月後にある。それで慌ててたのさ」

と、髭の男が口出しする。

「そういうわけです。巫女になれる王族の血をひく姫は二人しかいないのです。霊力を考慮して王の一人娘であるリリー様になる予定でした」

霊力云々はよくわからないが、なにやら名誉なことなんだろうと大和は思った。

「それって名誉なこととか？ もう一人は誰？ その人とか、その人の回りの人がもう一人の候補者に役目をさせるため襲わせたっぼくない？」

「椿！（思っても、言うんじゃありません。面倒なことになるかもしれないから）」

名前を呼んだだけのはずが、それに込めた副音声まで響いた。大

和は思わず口を押さえた。

「そういわれれば、そうかもしれませんね。ああ、ヤマト殿この指輪は言葉に込められた意思を伝えるものなので、言葉に込められたものが通訳されてしまいます」

それでいきなり言葉がわかるようになったのかと大和は納得した。それと同時にくらいにロジニア公が慌てだした。

「な、なにをおっしゃいますか（このガキどもなにを言いだすか）！ わしも娘も無関係ですぞ、ナリス殿！」

もう一人の候補者はロジニア公の娘のようだった。椿が瞳を輝かせた。

「おじさんの娘なんだ。あゝ、もしかして未完成の魔方陣を動かさせたのも、失敗して壊れることを見越してやったんじゃないの？ 間に合わないように。そうすれば娘さんが巫女だもんね」

「小娘（なぜ、それを）！」
「……………ロジニア公。心の声がダダ漏れだとわかっています（やはりそうか！ どうしてくれよう！）？」

バチバチと、ナリスのまわりで電光が散った。？通訳する指輪の魔法？をつけているのは大和と椿だけではない。ナリスもつけている。

ロジニア公が慌てて口を押さえたが、もう遅い。

「わざとですか……………わーざーと（わたしの大事な）魔方陣を壊したんですね！ 王命に逆らった すなわち反逆ですね（ただではすむとは思っていませんよねええ）」

「ナリス殿、魔力と心の声がダダ漏れだぞ（しまっといてくれよ、怖いから）」

ナリスが指輪をはずした。そもそも魔法が有効かどうか確かめただけで、大和と椿が指輪をしたらナリスがつけている理由はない。

「王に報告いたします。それまで謹慎しててください」

笑顔でロジニア公に言っていたが、？通訳する指輪の魔法？がなぐとも漂う怒りでその胸のうちは誰にでもわかっただろう。その副

音声を聞いてしまった大和と椿は、誰にも言うまいと硬く心に誓った。

ナリスって怒ると怖い。

兵士がロジニア公を部屋から連れ出した。連れ出されるまでロジニア公は何か怒鳴っていたが、兵士は聞かない。

「失礼しました。お見苦しいところを」

「いや……椿のせいでもあるし（お兄ちゃんはおまえの口が心配だよ。何でも思ったことを口にすることから）……さっき火花みたいなものが散っていたが、あれはなんだ（魔法か）？」

副音声ダダ洩れだった。この指輪の世話にならなくてもすむようになりたいと大和は思った。

「お見苦しいところを……取り乱していましたので魔力が洩れました」

「魔力って電気みたいね」

「あ、いえ、わたしの場合は電光の形で出てしまいますが、人それぞれです。火の属性の強い方は火が出ます。風の属性の強い方は突風とか小さな竜巻とか」

それはかなりはた迷惑だな、と大和は思ったが、副音声で出てしまつと困るので口を閉じていた。

「魔法って面白いわね」

わくわくと瞳を輝かせて椿が言う。

「あら？　ねえ、召喚陣だったわよね？　それって召喚する人間をどうやって選んでるの？　二つの魔方陣を利用するっていうのは、たぶん魔方陣の上のものをもう一つの魔方陣の上に移動させるって感じだと思うのだけど、呼ぶのはなにを基準に？」

「わたしもそれは不思議なのです。姫さま個人を召喚するはずでしたから。それで　失礼ですがお歳は？」

「十六、双子だから兄さんもよ。お姫様と同じね」

ナリスが腕を組んで考え込んだ。

「異世界ということが何らかの作用を及ぼしたのかもしれませんが。」

同じ歳に……その容姿……あなた方は姫様にあまりにも似ておられ
る」

3 お約束の異世界召喚 副音声は困りもの(後書き)

やっと召喚を実行した理由が書けました。この話にはまだまだまだ含みがあります。それは次回以降ということですね！！

4 王様からの依頼

容姿のことを言われ、大和はもう一人自分たちとよく似ていた人を思い出した。

二人が小さい頃事故にあって死んだ母。百合という。生きていれば母もこちらの世界に呼ばれただろうか？

父とは恋愛結婚だったらしいが 椿ならともかく、自分の顔をまじめな顔で凝視した後 「母さんに似てきたな」と、溜息をつくのは、やめて欲しいと切に願う。

気持ち悪いし、女顔だと自覚するのは正直へこむ。

扉の人が騒がしくなり、いきなり開いた。

「ナリス、召喚陣が壊れたと聞いた、なにがあつた」

やたらと威厳のある父より少し年上なぐらいのおじさん 立派な風貌の壮年の男性が開口一番言い放ち 椿を見て破顔した。

「リリー、帰つたか（父は心配しておつたぞ！ 痛いところはないか？）！」

「誰？」

男は顔を引きつらせた。

「なんだ、その服は！ はしたない！（許さん！ そんな扇情的な衣装を着せたのは誰だ！ 父は許さぬぞ！）それにその髪！ そんなに短くなつてしまつて！ 誰に切られたのだ（賊か！ それとも誰かの嫉妬で切られたか、可哀相に）！」

扇情的？ ただの制服の夏服である。マニアには扇情的かもしれないが。

短い？ 椿の髪は胸の辺りまであるいちおうロングだ。

「陛下、よくご覧ください。姫ではありません」

「ナリス！ よく見ろだと、こんな袖も裾も短い（短い！ 短すぎるぞ！ 腕が丸見えではないか！ 足も膝が！ ああ、脛まで丸見えだああああ！ いかん、いかんぞ！ 未婚の娘がなんたることだ

！ 見た男、許さん！ 後で成敗してくれるわ！）破廉恥な格好（恥ずかしくて父は見えておれぬぞ！） リリーではないだと？」
副音声で親ばか丸出し発言ダダ漏れなリリー王女の父（たぶん王様）が、椿をまじまじと見詰めた。

精悍な顔が一瞬呆ける。

「リリーではない（こんなに似ておる他人がいるとは）……」
につこりと椿が笑いかけた。

「始めまして、おじさま（ちょっと素敵かも。ダンディだわ）」

椿の言葉に初めて副音声がついた。思ったことをそのまま口にする椿にはあまり副音声はつかないのだろう もっとも年頃の娘に『素敵』と言われて気を悪くするおじさまはいないようだ。

目に見えて機嫌をよくする陛下。安い、安いぞ、一国の王。小娘の無意識に手玉に取られてどうする。

「……………」

今口を利用したら不敬罪になりそうなので、大和は黙っていた。

「こちらは（間違つて）異世界から召喚されてしまったツバキ嬢と兄君のヤマト殿です。それというのも（あの大ばか者）ロジニア公（いつぺん死んでこい）が未完成の召喚陣をわたしに無断で稼働させたためです（むしろわたしが叩き殺す）」

「ロジニアめか。あやつ、陣を壊させるためわざと動かしおつたな」
黒い発言ダダ漏れのなりナリスだったが、王様も負けてなかった。

副音声は大和と椿にしか聞こえないだろうが、ロジニア公を表現する単語を口にするとき必ず罵倒がはいる。これは胸にしまっておくべきだろうと大和と椿は思った。

「定着もまだしていない陣を動かさせるとは、どういう口実だったのだ、ディアボロ？」

「あゝ、期日も差し迫っているし、姫様さえ呼び戻せれば壊れてもかまわないだろうと魔術師に迫りました。魔術師は定着させた後魔術で繋がった先を調べないと確実とはいえないと申しておりますが、ロジニア公が権力にものをいわせ恫喝したのであります」

ディアボロの報告を聞いて王は苦虫を噛み潰したような顔をした。言葉に含まれる副音を聞いた大和と椿は思わず遠い目をした。その内容は　ロジニア失脚しないかな。したら嬉しいな。しっさやく、しっさやく　という大人気ないものだった。いや、大人だからだろうか？

「あの大馬鹿者が（いつぺん死ね）」

「しかし、もう巫女役がやれるのはロジニア公の令嬢しかいません。不本意ですが公に責任を追究することはできません。せめて、壊した召喚陣とこれから作る召喚陣の分の費用と、こちらのお二人の滞在費、帰還用の陣の費用を徴収させていただきたいと思いますが、許可いただけますか？」

「おお、許可する。せいぜい搾り取れ（水増し請求許可）」
子供達は大人の世界を垣間見てしまった。

ああ、腹芸。副音声恐るべし。

ロジニア公へのいちおうの処分を決めた王（推測）がじつと椿を見詰めた。

「うむ、よく似ておるな。最初は見間違えたぞ。そちらのヤマト殿もか、他人とは思えぬ。ううむ、息子が孫でもできたような気分だ」
「ツバキ嬢、ヤマト殿、こちらはリリー王女の父君であらせられます、ファルガ（個人名）・ートルズ（敬称）・ロディシア（家名）陛下でございます。わが国の王でございます」

やっと事実確認ができた。国王は改めて二人に向き直った。

「どうやら色々と迷惑をかけてしまったな。帰還用の陣は責任を持って作らせよう。それまでゆるりと滞在されるとよい。費用は出させるので心置きなく遊んでいかれるがよい（せいぜい疲弊されにくれたまえ）。さて、それとは別に頼みがあるのだが、きいてくれるかな？」

「頼み？」

大和は改めて王の顔を見た。妙に自分と似通っているところがあるので、本当に他人とは思えなかった。もし知らない人に甥と伯父、

もしくは親子だといえは疑われないだろう。

「お二人に關係することだが、特にツバキ嬢にだな」

「なにかしら？」

「帰るまで、いや、祭まででよい。我が娘リリーのふりをしてくれまいか？」

椿は軽く首をかしげた。

「お姫様生活には惹かれるものがあるけど、裏がありそうね。わけを説明してくれるわよね？ でなきや嫌。こととしいによつては全面協力するわよ」

好奇心マックスの椿に大和は頭が痛くなつた。

「うむ。ひとつにはリリーの失踪は極秘となつておる。姿をみせねば疑われる」

秘密だつたのか、と大和と椿は驚いた。この場にいる全員が知っていることだつたので、公然のことだと思ひ込んでいた。

「もうひとつには、祭の邪魔をしようとする輩が捕まつておらぬ。リリーがいなくなればセラフィナを狙うであろう。巫女は死守しなければならぬ」

「つまり囿ね」

「うむ。心苦しいが、目標を分散させねばならぬ」

「いいわよ」

「椿（そんな危ないことさせられるかああ！ それつてつまり狙われるつてことだぞ）！」

即答した椿に大和が逆上して椅子を蹴倒した。

「兄さん、落ち着いてよ。あのね、この話にはこつちにもメリットがあるし、避けられないことだと思つた」

「……………なんだ（お前の好奇心だけじゃないのか？ お兄ちゃんはな、お前のことが心配で反対しているんだぞ。お前に何かあったらどうすればいいんだ）」

「兄さんの一言つて雄弁ね」

「……………」

副音声なんて大っ嫌いだと大和は思った。

意外に落ち着いている椿が理論だてて説明した。

「まず、わたしは普通にしている椿が理論だてても間違われると思うの。だって実の父親が見間違えたのよ？ 間違われる可能性大でしょ？」

ナリスや兵士が頷いていた。そのとおりのようだった。

「だったら、リリーさんってことにしてもらったほうが護衛とかつけても不自然じゃないじゃない。わたしに眼が向けばそれだけセラフィナさん？ も、安全だわ。間違っても暗殺されないよう護衛をつけてもらえばいいのよ」

滞在中人目につけばリリー王女と間違われる。だが、たんなる異邦人にはそうは護衛をつけられない。互いの利益になる。と椿が力説した。

「これはこれは、賢いお嬢さんだな。理解してもらえて嬉しい。では、その服装から検めてくれるかな？ 我々には眼の毒だ」

椿は自分の姿を見下ろして首をかしげた。

「普通の夏服なんだけど、こっちではこの丈って短いの？ じゃあ、ミニスカートなんてないのね」

自動翻訳がどう説明したのかはわからないが、王が顔を真っ赤にした。

「そんなものはない！」

激怒なのか羞恥なのかは微妙なところだ。ビキニなど見たらこっちの世界の住人はどうなるのだろう。

「ひとつ聞きたいんだが」

「なんですか、ヤマト殿」

応えたのはナリスだったが、そちらの方がはなしやすかった大和はそのままきいた。

「なぜわざわざ祭の邪魔なんてするんだ？ 我々の世界では祭はたんなる楽しみなんだが。ここでは違うのか？」

「ああ、普通の祭はこちらでもたんなるお祝いで楽しみです。しかし四年に一度の陽月祭だけは違います。これを行わなければ、魔界

との道が開きます」

「魔界との道……………」

ファンタジーだ、と大和は思った。

「世界は小さな泡沫のようなものです。ひとつではなくそれこそ無数の世界があり、たとえていえば泡沫で創られた川のように常に流れ変動しております。我々の世界と魔界は遙か昔に接触し、道が通じてしまったと古代書に記されています。時の賢者と王はこの世界のありとあらゆるものの力を借り道を封じました。そして四年に一度、道を封じた王家の姫がまだ契約と感謝を忘れていないことを詠としてささげ、契約は続行されます」

「じゃあ、邪魔をしようとしてる人達って魔界との道を繋げようとしているの？」

「確証はありませんが、そうとしか思えませんね」

祭にそんな重大な意味があったとは驚きだった。巫女役の責任は重そうだ。

「……………わかった」

承諾するしかないだろうと大和は思った。

「ツバキ嬢は王女に扮していただくとして、ヤマト殿はいかがいたしましょう？」

関係ない異邦人とするにはよく似た外見が不審がられる。さりとて、隠すには兄妹を引き離すことになってしまおうとナリスがいうと、王はあっさり解決策を口にした。

「外国で育つた遠縁の甥、とでもいうことにしておけ。ならばツバキ嬢のそばにいても不自然ではない」

「王族を騙らせると？」

「いや、継承権を親の代で放棄していることにすればいい」

このようにして王様からの依頼で二人の身の振り方が決まったのだった。

4 王様からの依頼（後書き）

ちよつと間が空きました。すみません。

王様初登場ですえ。こんな親ばかりにするつもりはなかつたのですが、副音声機能が困ります。早めに言葉を教えねば。ちなみに大和くんが言葉数が少ないのは昔からです。

5 そこにあるはずのないもの

「衣装を持ってこさせろ。鬘も忘れるな。心得ておる侍女をよこさせろ。それに、子息の服もいるな」

王はここで大和を見た。

「ヤマト殿は武人かな？ その棒は見たことがない形だが」

大和は少し考えてから口を開いた。

「武人といえば言えるかもしれない。ある武術を受け継いできたが、現代 我々の世界のだな では実戦に立ったことがない。こちらの世界の人間から見ればままごとに思えるだろう」

「戦場にたったことがない？ そういう家柄なのかな？」

「どう考えているのかは知らないが、我々が生まれる前、祖国は戦争に負けた。そのときあまりにも悲惨な状況に永久に戦争をしないと誓ったんだ。戦争がなければ実戦もない」

「しかし、ひとつの国が戦争を放棄しようとしても、周りが戦争を仕掛けてくるだろう」

そんな長い時間は持たないのではないかと王が聞いた。

「少なくとも我が国は、六十年は戦争をしてないぞ」

王が眼をむいた。

「……………どうやって？」

どうやら戦争はよく起きるものらしい。

「交渉と経済よね。戦争を起こすような外交は下の下よ。戦争とか軍関係なんて金食い虫なんだもの。国が疲弊するばかりだわ。知りたければ機会があれば教えてあげる でも今知りたいのはそんなことじゃないでしょう？」

その場にいた全員が眼をむいて椿を見た。

「女ながらに鋭い観察眼よの」

「一般教養よ。わたし達のいた国では男も女も九年間教育を受ける義務があつて、さらに高度な教育を二年とさらに高度に教育を受け

たい希望者は受けられるの。で、兄さんが武人なら、なに？」

「ああ、剣をどうするかと……それは稽古のときに使う木剣であるう。我々が使っている剣とは形が違う。そなたが使う剣はないかも知れぬ」

「ないだろうな。あれはわが国独特のものだ」

大和の使うのは真剣なら日本刀である。日本刀は日本独自の剣であり、異世界にあるはずがない。

「あれって合金なのよね。二種類の鉄を溶かして造る」

「それは大変興味深いものですね」

椿とナリスが日本刀について話し始めた。

「ではどうする？ こちらの剣でよろしいか？」

「……………剣を持ち歩くのか」

日本でそんなことをすれば警察に捕まる。こちらではそんなことはないだろうが、気後れしてしまう。

「こちらの流儀だ。武人ならばな」

「ならば従おう」

「ディアボロ」

「は、陛下」

王に呼ばれて髭の男が返事をした。

「そなたに命じる。ツバキ嬢とヤマト殿の護衛につけ。ヤマト殿にはこちらの武人の流儀を教えるように」

「御意」

王は二人に向き直った。

「ツバキ嬢、ヤマト殿、これなるはディアボロという。生まれは低いが、わが国屈指つわものの兵だ。護衛兼案内役としてつけよう。よろしく頼むぞ」

「よしなに」

にやっとディアボロが笑った。

「よろしくね」

「面倒をかける」

さらっとした手触りは絹のようだった。長い裾のドレス。くるっと回れば裾が広がる。

「うわー、リアルお姫様」

本物のお姫様の代わりをするから当然なのだが、別室に移って侍女に手伝われて水色のドレスを着せられ、付け毛を足して髪を結った姿はまさに物語のプリンセスだ。

椿は鏡を覗き込んではいだ。

「ツバキ様は本当にリリー様にそっくりでいらっしやいますわね。お似合いですわ」

シーリアという落ち着いた感じの美女が褒め称えた。シーリアはリリーつきの侍女だったという。

「ありがとうございます。でも、やっぱりわたしは庶民だからあんまり人前に出ないほうがいいわね。ボロがでたら困るでしょ？」

見た目は同じでも所作や物言いが違うはずだ。とりあえずシーリアが上流階級の身ごなしや決まりなどを教育する手筈ではある。が、身近な人間には一発ではれるだろう。もっとも身近な人間の多くはリリーが行方不明になっていることを知っているので取り込み済みなのだが。

「ですから、祭まで教育の口実でナリス様の統括する賢者の塔に移られる予定ですよ」

「賢者の塔ってなに？」

「宮廷魔術師が住むところですよ。ですけど身の回りの世話をするものもまいますので、御不自由はさせません」

姫にふさわしいものを用意し部屋を整えるらしい。

「なんだか、ものすごくお金かかりそうね」

「御安心ください、姫には大きな財布がございます」

にとっシーリアが笑った。椿と大和の滞在費は全てロジニア公が出すことになっている。ロジニア公に対してあまりいい感情を持っていない椿も笑った。

扉が向こうから叩かれた。

「入ってもよろしいでしょうか？」

切羽詰ったような声がした。

「まあ、ナリスさま？ どうなさったのでしょうか？ 取り乱しているようですわ」

「開けてあげて」

シーリアが扉を開けると、分厚い本を数冊抱えたナリスが突進するような勢いで入ってきた。シーリアが眼を丸くする。

「どうなさいました？ ナリスさま？」

「ツバキ嬢！ これ、これはなんですか！」

ナリスが抱えていたのは二人とともにこちらにやってきた向こうの世界の百科事典だった。

「本よ」

「それはわかっています！ わたしが言いたいのは、これはあちらの文字でしようが、どうしてこんなに同じ文字が奇麗にまったく同じに書かれているのですか！ それにこの絵！ リアルにもほどがあります！」

「まあ、素晴らしく上手な絵ですわね」

横から覗き込んだシーリアが驚いていた。

なんでも二人とともにこの世界に運ばれたものを塔に移そうとして、この本の存在 異質さに気がついたのだという。ひらかれたページを見て椿は首をかしげた。

「印刷と写真よ？」

「インサツ？ 陰を写したものの？」

今度はシーリアとナリスが首をかしげた。

「あ こっちの世界ではないんだ。判子ってある？」

「あります」

「基本はあれと同じよ。あっちの世界ではもつと高度になっているけど、たとえば逆文字で文字を掘り出すでしょ、それにインクとか墨を塗って紙を押し付ければ文字の形にインクがつくでしょう。そ

れを繰り返し返せば同じものが大量に作れるわ。写真は」

ここで椿はナリスに印刷と写真について基本の仕組みを説明した。「素晴らしい！ そんな技術がこの世に ああ、いえ、異世界でしたか。とにかく、あるんですね！ それなら本が大量に作れますね」

「どうやらこちらの世界では本といえば手書きらしい。原本を写し書きした写本が一般的なもののようだ。」

「そうね、大量に作ってるわよ。写真もそうだけど、一般的なお楽しみだし」

「……………ツバキ嬢、あちらの世界の技術の話、もう少し聞かせてもらえますか？」

「がしつとナリスが椿の手を握った。その眼が異様な熱を帯びている。それは探求者のそれだった。」

「いいけど、わたしの説明よりわたしが持ってきた本の方に詳しく書いてあるわよ」

ナリスが百科事典に熱い視線を注いだ。やがてこれは椿とナリスの手によって翻訳されるのである。

こうしてこちらの世界に新たな技術が持ち込まれ 後にこちらの世界の技術と魔法と融合し新たな技術が生まれることに椿とナリスは気づいていなかった。

大和のために用意された服は軍服に似たものだった。それに着替えた大和にディアポロは笑った。

「いやあ、そういう格好をすると人間だと思えるな」

「……………なんだと置いていたんだ？」

「いやあ、妙な服着ていたからなあ。あれは一般的な服装なのか？」
片隅にたたまれている道着を顎でしゃくるディアポロに大和は少し考えた。

「……………日本の民族衣装のひとつだ（あまりふだんから着る人はいない。たまたま練習着だった）」

「武術の鍛錬中だったのか？ 変わった剣術だったな。少しうち者に披露してくれないか？」

「かまわないが……」

護衛の主とするべきは樁ではないかと大和は思うのだが、塔の内
部は魔法で守られているという。

大和は用意された剣を見た。

幅広で両刃、切っ先のない剣。これは大和には扱えない。

「この使い方を見せてくれ」

「おお、いいぜ」

こうしてここにも変革を迎える技術があった。

5 そこにあるはずのないもの（後書き）

オーバーツ。ある意味椿と大和がこの世界に持ち込むことになるものです。椿は物質的な革命を、大和は武術に関する技術革命です。さて、どうなることやら。

6 もう一人の巫女候補

我らは忘れじ その加護を
陽は天にあり我らをはぐくみ
闇はその腕に我らを抱き癒す

聞こえてきた歌声に大和は足をとめた。ナリスが声をかける。

「どうなさいました？」

「歌が……」

「ああ、これが陽月祭で捧げる詠ですよ。ロジニア公の姫君が練習なさっておられるのでしよう」

賢者の塔に移動するため中庭を横断途中、建物の中から聞こえてきた歌声に一行は足をとめた。

椿も立ち止まり指輪をはずした。大和も指輪をはずす。

伸びやかな声が美しい歌を続ける。

我らは忘れじ その加護を

火は穢れを払い 風は不浄なるもの払う

天は見守り 地は支える

「……兄さん、この歌……」

「……言うな。分かっている」

二人は耳をすませて最後まで詠を聞いていた。

大和は指輪をはめなおした。

「今のが詠か？」

「ねえ、今の詠って誰でも知っているの？」

「え？ はい。詠自体は小さな子供でも知っています。なにせ、四年に一回は儀式で詠われますし、よく教会でも感謝を捧げるために詠われます」

思いつめたような顔をして椿が聞いた。

「……リリー王女って、行方不明になってからどのくらい？」

「三ヶ月ほどですが」

「三ヶ月（そんなに短いの）……」

「……… 我々の世界の言葉でリリーとは花をさす言葉なのだが、こちらではどんな意味がある？」

「偶然ですね。こちらでも花の名前ですよ」

ナリスが植えられている花を指差した。

「あれです」

五枚の花弁が釣鐘の形に開いている花だった。花弁の中央が仄かにピンクで外側が白い。地球でいうところの百合かカサブランカの中間ぐらい花だ。大輪の白百合 に見えなくもない。

「………」

「……まさかね……」

「どうかしましたか？」

「なんでもないわ（お願い聞かないで。言いたくないわ）」

妙な顔をして黙り込んだ双子にナリスは首をかしげた。シールアが声をかける。

「あの、もうよろしいですか？ 賢者の塔に向かいませんと。顔を隠しているとはいえ、このようなどころでは誰に見られるかわかりません」

椿は顔を見られないように貴族の娘がよくするようなベールをかぶっているのだが、確かに中庭でぼうつとしていたら誰に見咎められるかわかったものではない。

「よいとここで会いましたわ。宮廷魔術師さま」

「こ、これはランカ姫。ご機嫌麗しく。素晴らしい詠でございました」

ナリスが慌てて頭を下げた。シールアやディアボロもそれに習うので、ナリスの陰で椿も従った。なるべくベールを深くかぶり顔を見られないようにする。

ランカと呼ばれたのは十代後半の少女だった。艶やかな黒髪を複雑な形に結び上げ、白いドレスをまとうている。黒目がちな眼は目じりが少し上がっていてきつい感じがする。つんとすましたシャム猫を連想させるたおやかな美少女だった。

「わたくしの機嫌がよいように見えるのなら、あなたの目は節穴ね。お父様が謹慎させられたと今聞いたところよ。なにがあつたのかしら?」

詠に謹慎。何かどこかで聞いたような話だ。椿と大和は視線をかわし、相手が自分と同じことを考えていると確信した。

(まさかまさかまさか)

「その話でしたか。陛下より祭に必ず間に合わせるよう、仰せつかった研究がございましたが、ロジニア公が横から手を出され台無しになりました。今からではどうしてい間に合いませんので、ロジニア公には陛下から責任を取るよう申し渡されました」

「お父様がそんなことを?」

似てない　　つつ!!

椿と大和は心の中で絶叫した。

話の流れからいうと、このすました猫を連想させるいかにも毛並みのいい美少女は、あのぶくぶくに肥えたお世辞にも美形とはいえない脂ぎった中年男ロジニア公の娘らしい。

母親似なのである。母親似なんだよね。母親似でよかったね。と心の中で繰り返す。

本当に血が繋がっているのか怪しいくらいに似ていない。

「はい。とりあえず謹慎してもらっておりますが、いずれ賠償責任がありますので」

ランカが悔しそうに唇を噛んだ。

「それは、仕方のないことね。でも、お父様は王族の血をひいているよ。蔑ろにされてよい方ではないわ。わかっていて?」

「それは重々」

ふとランカの眼が大和にとまった。

「あら？ 変わった方ね……リリーさまに似ておられるわ」

「こちらはヤマト殿です。陛下の遠縁ですが、継承権を放棄した方の末でございます。遠い異国から留学に來られました。こちらの習慣や言葉に疎いもので、御容赦ください」

「わたしは、ランカ（個人名）・メル（尊称）・ロジニアですわ。大公家のものですの」

ナリスが大和に囁いた。

「名乗ってください。家名があればそれも」

「神風大和……いや、こちらふうに言えばヤマト・カンナギになるのかな？ こちらの習慣や言葉はよくわからない」

「カンナギ？ 変わった響きですわね。異国の言葉ですわ。ようこそロデイシアへ」

すつと手を差し出す。

「跪き手をとって口づけるのですよ」

ナリスが大和に囁き 大和は赤面した。

女の子の手をとって口づける！ なんだそれは！ こっちの礼儀かっ！ そんな気障なまねをしろと！ 恥ずかしい！ 恥ずかしい！ 声にださず大和は悶絶した。

「ヤマト殿」

ナリスに促され、大和は方膝をついて手を取り、触るか触らないかのくちづけを指の先におとす。

ベールの陰で椿がにやにやしていた。

（んきやく、兄さん、素敵！ お姫様と、王子まではいかなくても、騎士ぐらいはあるでしょ！ きやく、きやく、女の子の夢よね）

幸いランカは椿には気づかず、社交辞令の挨拶をして立ち去った。

「いやあ、いつも思うんだが、あの姫さん、母親似でよかったよなあ」

まるで存在を無視されていたディアボロがこぼした。思うことは誰も一緒らしい。

「まあ、ソアラさまと瓜二つですから」

ころころとシーリアが笑う。侍女や護衛と言うものは気にしないのが礼儀なのだろうか。それで陰に隠れていた椿も見落としたのだろう。

「へえ、ロジニア公の奥さんってああいう顔なんだ。そんなに美人なのによくあのおじさんと結婚したわね（似合わな〜い）」

「権力と財力」

とディアボロが笑った。

「お若い頃はもう少し……（ええ、ほんの少しましでした。あんなにぶくぶく太るから）」

「フォローになってない。と思ったのは双子だけだろうか。」

「声をかけられると面倒です。塔に急ぎましょう」

一行は賢者の塔に向かって歩き出した。

「カンナギというのが家名なのですか。家名が名前の前に来る形式なのですね」

「そうよ」

「カンナギとは何か意味があるのですか？」

「カンナギは神を意味しているの。カミともいうわ。凧は風がやみ波が穏やかになること。無理矢理意味をつけるなら神を穏やかにすることかしら」

「素晴らしい名前ですね。もしや、神に仕える家系とか？ 水や風にも関係ありそうですね、そちらの魔力がおありとか？」

「どうかしら？ あっちの世界には魔法とかないから」

椿は少し考えた。名前のルーツなど考えたこともない。古流剣術を継承しているからには武士の子孫かも知れないが、四民平等の現在では意味がなかった。

「ではいずれ魔力と霊力の測定をしてみますか？」

「霊力と魔力ってどう違うの？」

「霊力は魂自体がもつ力です。それが変換したものが魔力になります。魔力は五元素のどれかを帯びますが、霊力はどれにも属さず、どれにでも変えられます」

「よくわかんない」

「いづれ教えてさし上げます」

6 もう一人の巫女候補（後書き）

あれ？ ツンデレフラグ立ちました？

7 禁断の果実の味は 味噌と醤油

大和と椿は賢者の塔にそれぞれ部屋をもらい、とりあえずこの世界のしきたりや礼儀、言葉などを教えられることになった。

リリーのふりをするなら指輪ははずさなければならぬ。

そこでナリスが目をつけたのが、椿が持ち込んだ百科事典の翻訳である。異世界の言葉を知らなければ、こちらの世界の言葉に直すのも難しいという理由である。

「なんとも難解な言葉ですね。四種類の文字を使い、それでひとつの文を作るとは」

「四種類？ ひらがな、カタカナ、漢字の三種類じゃないの？」

「これは？」

「ああ句読点、記号の類ね。これも文字に入れちゃうの？」

「あ、これも別系統ですね。いったい幾つの文字があるのですか？」

「ローマ字というか、アルファベットね。言われてみればややこしいかも。日本語は何でも取り入れちゃうから」

「あるふあべつと？」

「別の国の言葉よ」

椿は五十音をひらがなカタカナで書き、さらに思い出せるだけ漢字を綴っている。

ナリスによればこの国の文字の種類はひとつであるらしい。

「なぜここまで文学が複雑なのですか？」

「最初に漢字が海外から入ってきたのよ。形象っていうか、形で意味を持たせた文字ね。でも、画数が多くて書き辛いでしょ？ 省略したり続き文字にしたりしているうちに、ひらがな、カタカナという日本独特の文字ができたのよ。それらが長いあいだかかって独特の文学ができたのよね。わたし達にとってはこれが当たり前なんだけど、わたし達の世界でも珍しい文学みたい。新語もほとんど生まれているし。でも、海外のオタクは日本の漫画やアニメを原語で見

たいがためにこの複雑な文学に挑戦しているのよ。宮廷魔法使いのナリスさんならできるわよね？」

「まんが？ あにめ？ おたくとはなんなのかよく理解できませんが、やってみせましょう。こちらの言葉に翻訳してみせます」

大和も同じ机についているが、百科事典を翻訳してしまっているのだろうかと悩んだ。

発明や発見は偶然の要素が強い。気がつけば活用され発展していくが、そうでなければそのままだ。別の世界で見つけた法則や発明はこの世界を捻じ曲げてしまうのではないか。

「……いいのだろうか？ 本当にその必要があるのか？」

「わたし達が言葉を覚えるのにも通訳できないとだめでしょう？」

「ヤマト殿、翻訳はわたしとツバキ嬢が進めます。ヤマト殿は遠い異国から来たと説明してありますので、王宮の中なら比較的好きなところに行かれてもかまいません」

リリー王女が言葉を話せないのはおかしいので、椿はある程度言葉覚えるまで事情を知っている人間の前にしか出られない。事実上の軟禁である。

それを不自由と思うかどうかは別として。

「ディアボロ殿が明日にでも鍛錬場に御案内すると申しておりますが」

「ああ、約束したからな」

「では、今日はこのくらいにしておきましょう。お食事の準備もできています」

ナリスが宣言し食事の時間となった。

食堂に案内され二人はそれぞれ用意された席についた。ロディシアの食事は二人の感覚から言えば洋食に似たものだった。あきらかにフォークとナイフと思われるものがある。ナリスにこちらの食事の作法を聞きながら食べる事となった。

「どうでしょう？ お口に合いますか？」

「うん。わたし達の世界でも似たような食べ物があるわ」

「それはよかった。ヤマト殿、食が進みませんか？ お口に合わないものでも？」

「いや、それは大丈夫だが……」

「兄さん、たぶんこの世界にお箸はないと思うわ。和食も……ないかも。兄さんにはつらい世界かもね」

「……………」

大和は和食党だった。醤油と味噌のない世界はつらい。

「あ、でも、塩焼きぐらいは再現できるわよ。塩あるみたいだし。塩があれば干し魚も作れるわ。大豆に似たものがあれば、もしかしたら味噌や醤油も似たものが作れるかも？」

砂糖、塩があるのは確認できている。酒、みりん、味噌、醤油があれば和食が作れる。

「鰹に似た魚がいれば鰹節っぽいものなら作れるかもね」

和食の決め手は出汁である。昆布と鰹節があれば作れる。

「いや、郷に入れば業に従えというし……」

「なんですか？ それは」

「わたし達の国の調味料よ」

椿と大和は隣同士の部屋をもらっていた。

なかなか豪華な内装だ。椿にはシーリアがついていたが、大和にもシオンという付き人がつけられていた。

「こんなにそろえてもらって申し訳ないな」

「いえ、大丈夫ですよ。費用は気にしないでください」

シオンがにこにこしている。費用はたぶん全てロジニア公から出るのだろう。

寝巻きも用意されていた。着替えを手伝おうというシオンを断り、大和は早々にベッドにもぐりこんだ。

こちらの世界に少しでも慣れておかなければならぬだろうと大和は思う。下手をしたらこちらの世界で生きていかなければならぬ

いのだから。

今はロジニア公の懐から生活費が出ているが、いずれ何かで身を立てなければならぬ。なにが自分にできるのか。そんな不安が消えなかった。

翌日、朝食の後すでにこちらの礼儀作法と挨拶の勉強を始めた。数時間の後、迎えが来た。

「ディアボロ殿が迎えに来ました。鍛錬場に御案内するそうです」「そうか」

「こっちはわたしとナリスさんでやるから、行ってらっしゃい」「いつてくる……」

こうしてこの日から数時間ずつ兵士と一緒に鍛錬するのだが、この後椿とナリスを二人つきりにしたことを後悔することになるのだった。

7 禁断の果実の味は 味噌と醤油（後書き）

味噌と醤油、それに出汁は和食の基本です。

日本語の複雑さは周知の事実。これを習得する外国人の皆さんが日本語を勉強するきっかけがアニメや漫画というのも本当に多いらしいです。

ジャパニーズアニメーション強し。

8 名刀といえば斬 剣

「よう、よくきたな」

ディアボロが手を振った。

鍛錬場は天井のないだだっ広い野外だった。多くの兵士が木剣を握り稽古をしていた。見覚えのある者もいれば、知らない顔もある。仲間の練習を見ていたものや隅に設えられたベンチに腰掛けていたものが一斉に大和を振り返る。

長い髪を後でひとつに縛っているまだ若い男がディアボロに尋ねた。

「彼が異国の剣術使いですか？」

「おおよ、通訳の指輪つけているだろう。まだこつちの言葉はよくわからないらしい。ヤマト殿、こいつは俺の片腕のウィルだ」

「大和・神凧です」

「ウィルソンだ。家名はいえない」

「こいつ、貴族の出なんだが、次男なんで家をでなきゃならない立場なんだ」

ポンポンとディアボロがウィルの肩を叩いた。

「変わった木剣ですね」

「木刀といます」

大和はこの世界に持ってきてしまった木刀を持ってきていた。こつちの兵士が使っている木剣はあきらかに切っ先のないこちらの世界の剣をモデルにしている。幅広のそれと比べれば木刀は細身で先がとがっている。

「形状からすると、そちらが使う剣は片刃ですか？ 先が尖らせてあるのはいったい……？」

「変わった剣術を使うんだよ。ここで披露してもらおうじゃないか。おい、誰か相手してやれよ」

ディアボロに伝えてまだ若い従者が名乗り出た。

「隊長、自分が相手をします」

ディアボロに尊敬のまなざしをおくるのは、まだ騎士の資格を持つていない若い見習いだ。同じ年頃の大和が憧れの隊長に親しく声をかけてもらっているのが悔しいらしい。

「そうか。ヤマト殿、いいか？」

「かまわないが。これは芯に鉄が入ってて真剣と同じ重さにしてあるんだが、いいか？」

「こつちも同じようなものを使うさ。いいか、気をつけるよ。ヤマト殿の剣は」

「無用です。異国の剣術には負けません」

突きについて注意しようとしたディアボロを遮って見習いが氣勢を上げた。

「そうか、お前がその気なら、好きにしる。根性みせるよ」

「はい！」

鍛錬場の一角が開けられ、大和と見習い騎士　アルバが向かい合った。

「ギルとレンを倒したという異国の剣ですか。アルバに言ってやらなくてよかったですか？」

ある程度は話を聞いているウィルはディアボロに囁いた。

「身をもって知ったほうがやつのためだろう。舐めてやがるからな」
痛い目を見るのも経験だとディアボロが笑った。

上司の愛の鞭も知らず、初めの合図とともにアルバが大きく木剣を振りかぶり　大和はそこを突いた。三段突き　大和の得意技だ。

歓声とも悲鳴ともつかないどよめきがおきた。

アルバが木剣を落とし、突かれた腹を押さえて悶絶している。

「大丈夫か？　強く突きすぎた」

「ひ、卑怯だぞ！　あ、あんな攻撃！」

アルバがなじった。

「卑怯もくそもあるか。異国では当然の攻撃なんだろうさ。異国の

剣術だと知っていたはずだぞ」

ディアボロがアルバを諷めた。

「アルバ、きさまこれが真剣なら死んでいたぞ。死んでから卑怯だのなんだの言えるか？ 卑怯でもなんでもない。お前がヤマト殿より弱い。それだけだ」

がつくりとアルバがうなだれる。

「なるほど、あの攻撃をするから先が尖っているのですな。あの足捌きは徒歩であることを前提に？」

副隊長のウイルは大和の剣術に興味津津だ。

「そうです」

道場で対峙することを前提に足捌きが作られた。剣の使い方よりそれが興味深いらしい。

「洗練されていますね。実戦ではどうなのですか？」

「どうでしょうかね？ 実戦になったことがないもので」

「ギルとレンがやられた。その程度には強いさ」

にいつとディアボロが笑う。ギルが喉を突かれた兵士でレンが腹を突かれた兵士らしい。アルバが顔を真っ赤にして食い下がった。

「不意をつかれたんでしょう！ でなきや、やられるわけが」

「真剣なら二人とも死んでいる。実戦に不意打ちもなにもあるか」

剣を抜いたのなら反撃はあって当たり前。その攻撃が予想外だというのが本人の責任だとディアボロはいう。

「面白いな、その剣術。もっと教えてくれよ」

「かまわない。代わりにこちらの剣術も教えてくれ」

「おお、前向きだな」

こうして一日のうち数時間は鍛錬場で修行することになった大和だった。

召喚陣はすでにある程度の研究がされていて、やっていたところまでを再現するだけならすぐにできるのだが、材料がそろっていない。できるところまでやって注文した材料待ちだとナリスが言うの

で、大和は全面的にナリスを信用し、黙々とこちらの言葉や習慣を学んだ。そして一ヶ月が経とうとしていた。

あちらの言葉とこちらの言葉のすり合せは進んでいるようで、翻訳された言葉が多くなった。ナリスはすでに日本語をある程度理解できる。

大和はこちらの剣術を一から習っているが、これがなかなかしつくり来ない。やはり日本の剣術の癖が強く残っている。

ある日のことだった。

鍛錬場にナリスと顔を隠した椿がやってきた。大和は慌てて駆け寄った。指輪をはずして日本語で尋ねる。

「何しにきたんだ！ ばれるとまずいだろうか」

「そのように心配しないでください。顔は隠してますし、すぐにおいとまします」

「……日本語上手になりましたね」

顔を隠した椿が細長いものを差し出した。

「兄さんに持ってきたの。こっちの剣は扱い辛いでしょう？」

大和は眉を寄せてそれを受け取った。包みを開けてみるとそれは

「日本刀？ いったいどこから」

「再現してもらったの。ただし鋼じゃないわよ。こっちにある金属で同じような製法で作ってもらったの。時間短縮のため魔法まで使ったのよ」

「掬えも完璧に再現されているようだった。」

「どこからそんな金……」

「これも滞在費のうちです。武人は真剣を持つべきでしょう」

ナリスが微笑みながら言う。その笑顔が黒い。どうやら必要経費はロジニア公の懐から出ているようである。

「妹君が心配なされていたのですよ。知らない剣術を一から習うのは大変ですし、普通の剣は使えないでしょう？」

「抜いてみて」

わくわくと瞳を輝かせる椿とナリスに大和の心も少し動いた。

ディアボロとウィルがよってきたので、大和は慌てて指輪をはめた。

「なんだ、そいつは？」

「ヤマト殿のお国の剣を再現したものです」

「ほほう、ぜひとも中身を見せていただきたいものですね」

促されて大和は仕方なく刀を抜いてみた。鯉口までちゃんと再現されていた。刀身は色こそやや白っぽいのが、反りといい切っ先といい波紋といい、見事に日本刀を再現していた。いい仕事をしている。「これが……あの先は突きのためのものですね。なるほど、この剣ならあの剣術が生きる。美しい」

「細いな。刃はついているようだが、切れるのか？ これ」

首をかしげたディアボロにナリスがわが意を得たとばかりに畳み掛ける。

「それですよ。切れ味がわかりませんので、ヤマト殿にぜひ試していただきたいと思ひまして」

「据えもの切りか？」

「すえ？」

「試し切りのことだ」

巻き藁が用意され、興味を覚えた兵士たちが集まってきた。

ディアボロとウィルを筆頭に皆が興味深げに見守る。

「あれがヤマト殿の真剣ですか？」

「そうだ、ヤマト殿が真剣を使っていたら　よかつたな、木刀でアルバが悔しそうに唇を噛む。

大和は青眼に抜き身を構え　鋭く踏み込んで袈裟懸けにした。

芯の丸太ごと奇麗に両断し　残心の構えでとまる。

歓声が上がった。

「素晴らしい切れ味だ」

「見事」

「ヤマト殿？」

見事に巻き藁を切り捨てたにも関わらず、大和が顔を引きつらせていた。

「なんだ、この刀」

「不都合でもありませんか？」

「いや そうではないが」

首を振った大和の視界に、鍛錬場の隅に放置されているヒビの入った青銅の盾が入った。

大和はそれに歩み寄り

「これもらつてもいいか？」

「あ？ かまわないが おいおい、金属を斬ろうつてののか？ 無理に」

大和が刀を一振りすると、角の一部が奇麗に斬り飛ばされた

鍛錬場は水を打ったように静まり返った。当然だ。盾が斬り飛ばされたということとは防具の類が無意味だということだ。

「ざ 斬 剣」

「あら？ やっぱり兄さんもそう思った？ 予想以上の切れ味ね。なんでこうなったのかしら？ 使用した金属のせい？ それとも時間短縮に使った魔法が作用したのかしら」

日本刀にも優れたものに兜割りの伝説があるが、これはそれどころではない切れ味だった。

「ザン ケンというのが、この剣の名前ですか？」

なにも知らないウィルがきく。

「あゝそれはだめ。世の中には著作権というものがあるの」

「ふ」

「ふ？」

「封印だ！ こんなもの、造っていいものじゃない！ その製法、封印しろ！」

大和は取り乱して喚いた。危険物である。大量生産されれば世界が変わってしまう。

「えつと秘蔵すればいいのかしら？」

「これ一振りだろうな　なぜここで眼をそらす！」

「五本造って、一番できのよさそうなの持ってきたの」

「椿！　この一ヶ月、なにをしていたっ！　というか、これだけか？　こつちで造ったのはこれだけか！」

「えつとお、色々？」

「椿ー！」

後にこの五本の刀は和刀と名づけられた。

日本刀と呼ぶのは大和が許さなかったのである。

特に結局大和の物となった刀は後に『大和』の号で知られる一品となったのである。

この世に最初に持ち込まれた異世界の技術であった。

8 名刀といえは斬 剣（後書き）

斬鉄できる剣といえは、アレですよね。

いや、しかしこの世には著作権というものがあるのでっ！！！

9 善いも悪いもリモコ……人間しだい

「そこに座りなさい！」

「はい」

大和に言われて椿とナリスは大人しく座った。

「椿、どういふつもりだ！ お前だって発明によって世界が良くも悪くも変わることを持っているだろう！ あちらの世界でも公害問題が山積みなのは知っているだろうが。こちらの世界に持ち込むつもりか！」

「兄さん、わたしだって考えているわよ。でも、公害問題の多くはそれが人体にとって害のあるものという認識ができなかったためおきたことも多いのよ。予めそれを知っているのなら対策をとる事もできるわ」

刀の試し切りが終わった直後、血相を変えた大和に引き摺られるようにして一行は塔に帰ってきていた。ここなら気兼ねなく話ができる。

「ツバキ嬢の知識で身体に害があると初めて知らされたものもあります。一部のものに規制をかけるつもりであります」

ナリスが訴えた。

大和は少し考える。確かに自分達の歴史でもそれが人体に害あるものと知らず化粧品として使っていたり、顔料や塗料として使われていたものも多い。

鉛や砒素、一説によると塗料として部屋に使われていたものせいで歴史上の人物が毒に侵され死んだという。塗料に含まれていたある有害成分がカビによって空中に放出され、それを吸い込んだのが原因だという。

確かに知識は人を救うこともある一概に持ち込むことが悪いとは言えない。

「それはそうだが……」

「わたしだつて考えているわよ。実験の中身は考慮しているわ。兄さんの刀は別。だけど、兵器はもう作らないわ」

兵器の進歩は他のものの比ではなく世界を変える。銃しかり連発銃しかりだ。連発銃を作り出した一族は大いに栄えたが、次々と奇怪な死に方をし、奇妙な城を残して途絶えたという。そしてその銃が作り出されたことにより戦争はより悲惨なものになったという。

「それは守れよ。絶対だ」

凄惨な歴史をもたらすきっかけにはなりたくはない。

「はい。誓うわよ。銃もロケットも作らないわ。趣味じゃないし」

この世界には拳銃は火縄さえない。代わりに大規模の攻撃魔法があるらしいが。

「で、他になにを造った？」

改めて大和が尋ねると椿が目をそらした。

「色々」

「たとえば？」

重ねてきくと、椿が観念したように言う。

「……ブラジャー」

大和は赤面した。

「な、な」

「だつて、こつちの世界のは具合が悪いのよ！」

椿も顔を真っ赤にして訴える。

考えてみれば一ヶ月が過ぎている。当然下着も替えている。何枚か使っているだろう。別の世界の下着には当然違和感があるが、特に女には男にはわからないナニカがあるのだろう。

「材質は無理でも、裁断とか縫製とかは参考にできるわ。シリアさんに協力してもらって、やっと満足できるものができたのよ。それに付随して、ホックと足踏みミシンも再現したわ」

ミシンの発明はある意味革命を起こした実績がある。

「少しは発達してもらわないと暮らし辛いのよ！」
シリアも椿を擁護した。

「ツバキさまがこちらの下着になれないのは仕方ありませんわ。あのような優れた下着を使われていたのですもの。あの下着は素晴らしいですわ。その証拠にわたくしも使わせていただいております」「いや、そこまでは聞いていませんから！」「思わず突っ伏す大和だった。」「もういいです……」

すっかり毒気を抜かれた大和は最後に兵器は作らないと約束させて部屋を出た。

真つ赤になつて部屋を出て行った大和に椿はしてやったりと笑みを浮かべた。

「相変わらず純情ね、下着ぐらいで」

「可愛らしいですわ」

ほほほとシーリアが笑う。大人の余裕？

「おかげで他のプロジェクトはばらさないますみましたね」

椿とナリスが造っているものはまだあった。最初に女の下着を白状したので他のものは秘密にできたのだ。大和のことを知り尽くしている椿ならではの作戦だ。

策士である。

「兄さんが知れば、必ずストップをかけるものね」

うふふふと椿が笑った。

「よろしかったのですか？ あのことを言わないでも」

「いいのよ。あんまりいい顔はしなれないと思うわ」

椿発、異国風の下着ブラジャーは、シーリア経由で城の下働きの女性を中心に広まりつつあった。

つまりは商売として成立するのである。

「いつまでもおじさんの懐を当てにするわけにもいかないもの。いつか自立できるようにしなきゃね」

そのためにもガンガン研究費を出させて商品開発取り組む椿であった。

「ツバキ嬢ならこの塔で引き取りますよ。その知識だけで国益になります」

そのころ、巨大な財布とみなされたロジニア公は予想外の請求書に目を剥いていた　　というのは余談である。

兵士の鍛錬場にふさわしくない清楚な客があった。侍女を引き連れてあたりを見回す姿に、ほうつておくこともできずディアボロはいちおう声をかけた。

「どなたをお探しですか？　ランカ姫」

「べ、別に探してなんかいませんわ」

つん、とそつぽを向くロジニア公の姫だった。

「そうそう、異国からきたという方はどうされましたの？　めずらしい剣術を使われると聞いたのですが」

「ヤマト殿ですか？」

「確かそんなお名前でしたわね」

仄かに頬を染める美少女の心のうちを読み違えるほどディアボロは疎くはなかった。

「残念ですが、急用ができて席をはずしております。いつもならいるんですがね」

「そうですか」

「あの剣術は確かに独特ですよ。明日にでもこの時間においでになれば見られると思いますよ。気が向いたらお越しください」

「き、気がむいたら、そうしますわ」

つんと取り澄まして言うと、姫君はお付のものを従えて鍛錬場を後にした。

「いやいや、ヤマト殿もモテるねえ」

「あのランカ姫が興味を持つとは驚きですねえ」

「面を考えな。ああいうのは女が好きそうな顔じゃねえか？」

「しかし身分を考えますとね　　」

隊長と副官はしばらくその話で盛り上がっていた。

本人も知らないだろうが、異国から来た謎の剣士は密かに人気があった。小間使いの少女や侍女が密かに鍛錬場のぞきにきているのであった。

9 善いも悪いもリモコ……人間しだい（後書き）

タイトルの元ネタ分かる人が何人いるんだか……古い。

10 恋にリハーサルはありません

陽月祭が近づくにつれ祭の準備が整えられていく。巫女役である姫が支度に姿をみせないのは不自然である。そこで椿がリリー姫のふりをして立ち会うこととなった。

陽月祭では巫女役が中央に立ち、詠を捧げるが　その脇に巫女候補もしくは予備の巫女役　セラフィナと呼ばれる　が立ち合唱するらしい。

ロディシア王族は基本的に男系で女が少ない。巫女、もしくはセラフィナの条件に当てはまるのは二人しかいないのだ。次に条件に近い女性は前回の巫女を務めた女性で、現在三人目の子育て中というぐらい歳が離れている。

唯一のセラフィナはランカ姫だった。

「リリーさま、ご機嫌麗しく」
しとやかに挨拶をするランカに、椿も付け焼刃だが上流階級の挨拶を返す。

「ごきげんよう、ランカ姫」
こちらの言葉はナリスが付きっ切りで面倒を見てくれたのでだいぶ上達した。細かい会話は無理だろうが、礼儀作法程度はなんとか。舞台は広く、観客席は多かった。野外ステージといえはわかるだろうか。

貴賓席も用意されており、まだひと月もあるというのに会場は熱気に包まれていた。

「御存知でしょうが、詳しく説明させていただきます。まず巫女さまの立ち位置はここです。この前には台座が設置されまして、契約の水晶球が置かれます。契約の水晶球は古の契約のさいに作られた神器です。巫女さまとセラフィナの詠に反応します」

ナリスが説明を始めた。椿も前日に一通りは説明してもらったが、興味深く聞いていた。

契約の水晶球は王族の血をひく姫の詠にのみ反応するのだそうだ。万が一を考えてここにはまだ置かれていない。

ナリスが巫女の立ち位置に立ち、正面の上空を指差した。「祭のさいはあのあたりに封印のほころびが出ることもありますが、詠とともに再封印されますので、驚かれないでください」

聞いたところによると、ごく稀に道を封じた封印が緩むのが目に見えることもあるという。異界　魔界と称されるほどの恐ろしい世界が垣間見えるのだという。

どんな世界か実に興味深いが、いったん封印が完全に解けてしまえば再封印することは難しい　ほとんど不可能だという。興味本位で封印を損なうことになれば取り返しがつかない。契約は続行されなければならない。

そもそもロディシアは封印を守るためにできた国なのだという。魔界との道が通じたとき、世界は混沌に落とされた。魔界の道を封じる方法を見つけた者が王となり、契約の続行を続けるためその血筋を守るため国ができた。王族ありきの国。世界を守るため王族を守らなければならないのだ。

そういう経緯で誕生した国であるため不可侵の国でもあるのだ。だが、古の契約を信じる古くからある国はともかく、歴史の浅い新興国はその豊かな国土に色気を見せるところもあるという。

魔界との道を繋げようとする勢力か、あるいは儀式を失敗させることによつてロディシアの権威を失墜させ、不可侵にするに値しない国だと認識させたい国　そこいらあたりが怪しいのだそうだ。

（責任重大ね）

椿の役割はリリー王女のふりをして、本来セラフィナであるランカに向けられる敵意をひきつけ守り、敵をおびき寄せることである。「声の響き具合を確かめてみたいと思います。ランカ姫、ここに立つて声を出してみてくださいますか？」

「あら？　リリーさまがなさった方がよろしいのではなくて」

「リリーさまはいま少し喉を傷めていまして。ああ、大丈夫です。」

軽いものなので祭までには治ります」

当日巫女の役割を果たすのはランカである。だが、それは直前まで伏せられることになった。

「ではわたくしが」

ランカが巫女の立ち位置まで進み、声を出した。発声練習のような意味のない声だけだが、さすがに美しい声だ。伸びやかな声が会場となるホールに響いた。

巫女の正装をして詠うところを想像すると、絵になっていた。

(さすがに本物のお姫様ね)

一通り舞台の点検を終えると、二人の仕事はなくなった。

「リリーさまは今賢者の塔でお暮らしてしたわよね」

「はい。警備の関係上、しかたなく。四ヶ月前の事もありますもの。賊は討たれたとはいえ、命じたものはわからないままでしたでしょう」

ランカに話しかけられ打ち合わせどおりに応えた。

「……塔には異国から来たという方もいらっしやいましたよね」

はい？

眼をそらしながらも仄かに頬を染めるランカ姫に、心の中でニヤついた。

「ヤマト殿とかいう方ですわ。お会いになられたことはありません？」

(兄さん、モテモテ！ ヒュウヒュウ)

椿は心の中で喝采を叫んだ。

「ええ、お見かけしたことはありませんわ」

というか、兄です。とは役柄上口にできなかった。副音声付指輪をはずしてよかったですと思った。

「気になります？」

ずばりときくと、ランカが横を向いた。

「そ、そういうわけではありませんわ。異国の方だということで、めずらしい話でも聞けるかと」

そういうランカが密かに（付き人が多いのでちつとも隠れていないが）鍛錬場へ足を運んでいることは確認済みの椿だった。

「そういうリリーさまはヤマト殿をどう思われますの？」

「兄、のようなものですわ。楽しい方ですけど、それ以上ではありませんわ」

即答する椿だった。

真正正銘双子の兄妹なので恋愛感情は無い！ まったく無い！

むしろ、お姫様との身分違いのロマンスのにおいに乙女心（好奇心）が疼く。

「楽しい方……ですか？」

「同じ塔にいて、護衛みたいなことをしてくださいますもの。話をすることもありますの。よろしかったら、今度ランカ姫も御一緒にお茶でもいかがですか」

ランカの整った美貌が見る見る朱に染まる。もじもじと恥ずかしげに身をよじる姿が妙に『恋する乙女』という感じだった。

（んきやく、可愛いじゃない！ なに、この可愛さ！ デレ！ デレよね、これ）

「そ、そうですね。暇になりましたら、お茶ぐらい御一緒してもかまいませんわよ」

（ツン、精一杯のツンだわ！ ツンデレ〜！ きゃ〜！）
「楽しみにしていますわ」

届けられた請求書を前にロジニア公は机に沈んだ。

「な、なんだ、この費用は！」

膨大な額だった。払えないことも無いが、人間二人の滞在費と召喚陣三つ分とは思えない。事業の一つ二つ興せそうな分が加わっている。しかもこの先まだ来るだろう。

懲罰ということなのだろうが、頭が痛い。

「だ……だが、これでランカが巫女だ」

娘が生まれたとき、ロジニアの頭の中にはそれがあった。四年に

一度、国の威信をかけた陽月祭の巫女。これほど誉れ高いことは無いだろう。しかし、すぐにリリー王女が生まれ、ロジニアは落胆した。

なにも今生まれなくてもよいものと。巫女が一人しかいずセラフィナ無しで祭を行うこともあるというのに、同時期に生まれるとは。

巫女はなにも生まれただけで選ばれるのではないが、リリー王女は霊力も強く、彼女がいる限りランカはセラフィナでしかない。

リリー王女がいなくなった今、千載一遇のチャンスだったのだ。逃がすわけにはいかない。

ひと月後にはランカが巫女を務め、そのひと月後にはリリー王女が帰還し、二人の異世界人は元の世界に戻る。それまでの辛抱だとロジニアは思った。

ランカには最初で最後の大舞台だ。盛大に祝わねばならない。そのための費用と思えば安いものだ。衣装も豪華なものを用意させよう。宝飾品も忘れてはならない。美しく装わせねば。

ロジニアは愛娘が巫女を勤める幻影にうっとりとした。

10 恋にリハーサルはありません(後書き)

恋する乙女ネター本!!!ラブコメ?

11 教育って大事なものだっただんですね……

「というわけで、お祭の後お茶会するから出席してね」

塔に帰ってくるなり椿が事の次第を大和にいつて聞かせた。

「椿……」

勝手にお茶会の約束をしまった椿に大和は眉をよせた。

「時間が取れるのは陽月祭のあとよね？ そのときにはランカさんに巫女やつてもらった後だから、正体ばらしても問題ないでしょう？」

にこにこ陽気に笑う椿に大和は不機嫌に言った。

「面白がっているだろう、お前」

「え、心外だな。そういうふうに言われるの」

「……聞いた話だが、王族の血をひく姫は国内で嫁ぐことが決まっているそうだ」

「え！ なに、それ？ 誰に聞いたの？」

「……ディアボロさん」

椿には言っていないが、最近の大和はディアボロやウィルにランカ姫のことで散々からかわれている。

ただ、本人達も笑い話にしておくつもりらしく、最初に釘を刺されている。

本気になるなよ、と。

「それって、政略結婚とか？ あ、違うか。政略結婚なら他の国の王族に嫁がせるわよね？」

椿の疑問に答えたのはナリスだった。

「我が国の姫は誰でも巫女になりうる貴重な存在なので、国内にとどまっていたりするため国内で嫁いでいただくことになっています」

男系の王族であるため巫女になれる女を他国に嫁がせるわけにはいかないのだ。そのためロディシアでは他国との政略結婚の類はでない。

「ああ、そつちね。恋愛の自由って無いんだ。可哀相」

「貴族の大半はそうですよ。結婚と恋愛は別物と恋愛を楽しむ方もいらつしゃいますが、ヤマト殿は二カ月後には元の世界にお帰りになれる予定でございますよう？　あまり親しくなれるとわかる時につらいのでは？」

「とうわけだ。わかつたな」

「つまんない」

むつつと椿がむくれた。

でも、それは帰ればよね、と椿は心の中で呟いた。

「もし、こつちに残ることがあれば……」

「身分違いだ。あつちは王族の血を引く大貴族。こつちは身分がない」

異世界からきた人間には身分など無いのだ。日本にもかつて身分制度があつた。土農工商これに公家などがあつた。しかし四民平等が謳われ、現在ではいちおう皇族以外は平等だとされている。閑話休題　いちおう二人はナリスの後ろ盾はあるが平民ということになる。

「つまんない」

祭が近づくと忙しいのは舞台を作る人間だけではない。警備の間も忙しくなり、人手が必要とされる。

「使えるものは、猫の手でも使いたいんだよ」

というディアポロの言葉で大和も警備を担当することになった。働かせる代わり、給金もちゃんと出る。一時的にディアポロの隊に所属することになったのだ。

前に大和に突っかかったこともあるアルバが不満そうに顔をしかめた。

「こんな素性もわからない者を隊にいれるなんて」

聞いたところによるとディアポロの隊は身分は問わないもののエリート集団なのだという。希望者は入団試験を受け合格したものが

やっと見習いになれる。この試験を受けることすら難しいのだという。

国内の貴族出身者なら無条件に試験を受けられるが、そうでないものは地元の選抜試験をまず受けないといけない。そこで選ばれたものがはれて王都に行くことができる。ただし選抜試験を受けるにあたって厳しく身元が確かか調べられるのだそう。

試験は大変厳しいものらしい。受けたものの十人に一人が受けられはいいそう。

異国から来た身分も知れない試験も受けていない人間が隊に所属することに不満があるらしい。もっともそれはアルバだけではないようだ。

召喚に居合わせたり事情を知るものはともかく、そうでないものは不満をあらわにした。

「おまえら、ヤマト殿は継承権を放棄して外国に行った王族の子孫だと言っているだろうが」

そういうことにしてある。

「それに、試験ならしなくてもやったと同じだろう？」

「いつしました？」

「おまえがしただろう？」

「え？」

アルバがきよとんとした。試験した覚えは無い。

「ヤマト殿はおまえを倒した。試験を通過してきたものをだ。ギルとレン、それにおまえよりも強いということを証明している。今さら試験はいらんだろう」

アルバ、それに召喚時に大和に打ち倒された二人の男が赤面し俯いた。

「まだなにかあるか？」

「あ……ありません」

「じゃあ、仕事割り振るぞ。ああ、ヤマトは和刀を持っていけよ。

こっちの剣は使い慣れていないだろう」

大和は頷いた。

こうして大和はディアボロの部下になった。そのため殿はつかなくなつた。

大和の仕事は昼間である。さすがに夜など危険が増す時間帯に新米や見習いは使えないということらしい。いわば案山子だと大和は思う。

その日、仕事の後なんとなく机の上に置かれていた書類を見て、大和は足をとめた。

「どうしたよ」

コンピを組まされているアルバが声をかけた。

「この計算、まちがってないか？」

「計算？」

つい先日、大和はナリスにこちら側の数字を教わつた。つい書類に数字が書いてあつたので頭の中であちらの数字に直していたのだ。そこでなんとなく計算が違つたような気がした。

「おまえ、計算なんかできるのか？」

「？ できるだろう。ふつう」

アルバがなんともいえない顔をした。

大和は軍服のポケットから椿が作ってくれた早見表とメモ用紙、偶然こちら側に持つてきてしまったシャーペンを取り出し、自分達の世界の数字に置き換え暗算してみた。

「やっぱり間違っている」

「いくつだ？」

「二十四……って、隊長！」

苦虫を噛み潰したようなディアボロが後に立っていた。

「二十四だと？ ちょうど一箱分じゃねえか。どつりで少なく感じたわけだぜ。おい、ウィル」

「なんですか？」

別室にいた副官が顔をみせる。

「この計算間違っているよ」

「え！ あつちでした計算ですよ。おかしいな」

ウィルが慌てて紙とペンを持ってきて確かめ算をしているようだった。

なぜ隊長が自分からしないのか大和は不思議だったが、『できて普通』と言ったときアルバが微妙な顔をしたのを思い出した。

「ああ、確かに間違っています！ 二十四も！」

「おい、他の書類も確かめてみる。何度が足りなくなって追加を注文しただろう？ あれ、元から数が少なかったのかもしれん」

ウィルが書類を引つ張り出して計算を始めた。元凶である大和もやらされた。結果として箱ひとつ分とか樽ひとつなどという小さな計算違いがいくつも見つかった。

「あんの、やろう。大和、ウィル、殴りこみにいくぞ！ ついて来い！」

ディアボロに促されて後を追いかけた。そのときウィルにこっそりと耳打ちした。

「もしかして、計算できる人とできない人がいるんですか？」

「いるよ。貴族や商人は読み書き計算できるけど、そうでないとできる人とできない人がいる。君はできるということは、あちらの世界では貴族か商人の子息か？」

「……いえ、元の世界の故国では義務教育といって九年間教育を受けます。元の国では読み書きができたり計算ができるのが当たり前なので……」

「国民のすべてが読み書きができて計算もできるのか！ そんな国があるのか！」

教育水準の違いというものをありありと感じた大和だった。そもそも元の世界でも日本のような国はそれほど多くは無い。そもそも日本だと大戦前は学校に行けない人間が多くいたのだ。前人のさまざまな努力により、誰もが学ぶことのできる教育制度ができたのだ。日本は恵まれた国だったのだと改めて感じる大和だった。

「くおら、この計算間違つとるぞ！ 責任者でてこーい！」

日本で言えば財務省になるのだからか？ 物資や配給品などの管理を行う窓口にディアボロは突入した。

「な、何事ですか？」

泣き出す一歩手前の役員にディアボロは件の書類をたたきつけた。「計算しなおしてみろ！ 一箱分も間違つとるぞ！ これじゃ足りなくなる！ これだけじゃない、前の書類も計算違いがいくつも見つかっているんだ、正当な数量を要求する！」

「え？ 許可印もあるようですが？」

ちらつと書類を斜め見した職員の背後から手が伸びた。

薄い茶色の髪とごく薄い青の瞳、背の高い痩せた男だった。冷たく整った顔には片眼鏡をしている。

奪い取った書類にざつと眼を通し

「確かに間違っているな。ディアボロの隊に一箱渡してくれたまえ。それから こんな腐れ書類を作成した本人と許可を出した上司を執務室に呼び出せ」

氷河期もかくやという絶対零度の視線を投げかける。

「すまないな。こちらの手違いだ。すまないが、他にもあつたかもしれない。そちらにある書類の類を提出してもらえるか？」

「ああ、すぐに持ってこさせる」

男はあたりにいた役員すべてに声をかけた。

「他の隊にもあつたかもしれない。すべての隊に書類を出してもらい、確かめる。間違いのあつた書類の製作者と許可を出した上司、すべて事情聴取だ！」

あたりに悲鳴がこだました。

「かわいそくに。今日、残業だぜ」

「今日一日ではないでしょう」

「こそこそ隊長と副官が囁きあっていた。

「横領でしょうね」

「あ？」

「一箱分つて、そんなきりのいい間違いがありますか？　しかも何
度も。むしろ、わざと数字をごまかしたんじゃないかと」

「ヤマトは頭がいいな」

ディアボロが感心したように言った。

この件は大和の推測どおり横領だった。あつちの隊、こつちの隊
と小規模に数字をごまかしつつ物資の横流しで懐を潤していた常習
的な不届き者がひきずりだされたのだった。

国庫を預かる財務大臣が激怒したのは言うまでもない。

11 教育って大事なものだっただんですね……（後書き）

なんか本筋からちょっと離れました。

名無しの片眼鏡氏、人使いの荒さとその有能さで知られている人です。チヨイ役なので再登場するかな？

12 知恵売ります

件の片眼鏡の偉い人がやってきたのは一週間ほど経ってからだった。部下らしき人が大きな箱を抱えている。

「この前はお手柄だったな。これは報酬だ」

「あれ、横領だったそうだな」

「そうだ。そちらの隊の訴えから調べなおしたら、あちこちから少しずつ横領していた」

大和とウイル　そのほか計算のできる隊の人間は遠い眼をした。あれから書類がとつてある五年分の明細をすべて計算しなおしたのだ。一国の経済すべての五年分である。經理の人間だけでは足りず、他の部署の計算のできる人間はかりだされた。

彼の部署の使いの荒さを身をもって知った　どこか遠くへ行きたい　切に願ったものだった。

「実家が裕福な貴族が大元で、少しばかり小遣いが欲しくて国の金を勝手に持っていったようだ。見つければ金を払えば許してもらえらると思つていたらしい」

ディアボロが鼻を鳴らした。

「結局金でかたをつけるんだろうが」

「まあ、関わった人間は全員罷免。横領した金額はすべて返還のうえ、国に対して罰金ということになるが　正確な賠償金額は未だわかつていない。書類の無いものもあるからな」

『搾り取れるだけ搾り取つてやる』という副音声は指輪をつけている大和にしか聞こえないはずだが、それは回りの人間にもわかったようだ。一様に顔色を変え後退っている。強い決意は魔法の力を借りずともにじみ出るものなのだろう。

ちよつと怖い。

「ヤマトくんだったね」

片眼鏡の役人が大和に声をかけた。

「君、うちの部署にこないか？」

「辞退します」

即決で断る大和だった。

「なぜだね？ 君は計算も速いし、見込みがある。武人にしておくには惜しい」

人使いが荒いから とはさすがにいえなかった。部下になつたら使い倒されそうだ。確実にこき使われる。

「……外国から来たのでこちらの字がよくわかりません。いま学んでいる最中です」

借り出されていたときも、いちいち元の世界の数字に直してから計算していたのだ。かなり効率が悪いと思う。

「そ……それにしても、今までよくばれませんでしたね。けっこうあからさまな手口だったのに」

「……」

「……」

「……」

經理の役人があさつての方を見た。

ディアボロが飛んでもいない鳥を探す。

ウィルが視線をはずした。

「……書類を二つ用意してわたしには正しい数字の書類が来ていたのだ」

「……二重帳簿」

「各部署はすでに計算してあるものだからと確かめずにそのままの数字を信用していたということもある」

「……」

この事態に各部署に対して確かめ算を行うことを義務づけたという。再発防止のためだった。ちなみにディアボロの隊では他にあまり重要な仕事を任されていない大和の仕事だった。

数字とお友達している毎日だ。

「まあ、同じことはおこさせない。面子にかけて。それはおいとい

て、君が移籍したくないというのなら仕方ない。諦めよう。それで相談があるのだが」

「なんですか？」

「君が使っていた便利な道具だが、ぜひとも我が部署で使わせてもらいたいのだ。あれはどこで購入できるのかな？」

「便利な道具？」

何のことだか大和にはわからなかった。

あの時持ち込んだのは筆記道具ぐらいなものだ。シャープペンの芯は限りがあるので　こちらの世界ではさすがに0・5の芯は造れない　なので、鉛筆と消しゴムを椿が持たせてくれた。

「鉛筆と消しゴムぐらいしか持ち込んでいませんが？」

「エンピツとケシゴムというのか。それと、あの、小さな金属でできた　書類をまとめていたやつ」

「もしかして、クリップですか？」

「そう、ぜひ購入したい」

「……………」

大和は言葉を失った。

あまりにも身近にあるもので普通に使っていたものだが　思い起こせば、なぜか周りから貸して欲しいとよく頼まれた。

皆、確かめ算のメモもインクとペンでしていた。ずいぶん仰々しいと思っていたが、もしかあれば

「鉛筆と消しゴムって、この国にはないんですか？」

「ない。クリップもな　わたしは君が使っているの、始めて見た」

「椿……（またやったなー）！！」

「エンピツは十二本で一ダースというのだそうです。これで一箱です。ケシゴムは十個でワンパックだそうです。クリップは二十個単位でどうでしょう。おいくつ購入されますか？　エンピツケズリもあります」

にここにことナリスが聞いた。

「うむ、これは異国の品物か？」

「はい。ヤマトどのやツバキ嬢の祖国で日常的に使われているものを再現しました」

「便利な品物だな」

結局ナリスが窓口となつて販売することになってしまった。

「ツバキ嬢とはヤマトくんの妹君だそうだな」

「はい。大変賢い方です」

「確かに商才はありそうだ」

片眼鏡氏は感心していた。

かくしてエンピツ、エンピツケズリ、ケシゴム、クリップ、などの品物がお役所御用達となり城で普及し、やがて国内外に広がっていく事となるのもう少し後のことである。

椿の言い分

「だってー、無いと不便なんだもの。兄さんだって助かったでしょ？」

12 知恵売ります（後書き）

すいません、今回短いです。いっぺんここで切らないと次の話がおかしくなります。大和くんの女装を期待していた方すみません。

もう少しお待ちください。

13 二度とやらないぞ！

青白い月光が寺院の窓から室内を照らしていた。

その人は深くかぶったベールの下から月を見上げる。闇のなか月に照らされ白い人影が浮かび上がっている。

白いゆったりとしたドレスは飾りの少ないシンプルなものだが清楚な雰囲気をかもし出している。薄く化粧をした顔は緊張のためか心持青ざめていた。十六ということだが、どこか凛々しく大人びて見える。さらりと癖のない黒髪がベールのしたで揺れる。

錫杖なのだろうか、白い布で包まれた長い棒のようなものを持っている。あれで抵抗されれば少しは手こずるかもしれない。

警備のものが来る前に速やかにことを行わなければならぬ。

物陰に潜んでいた男はそつと得物を構えた。男の得物は剣ではない。長い針 ナイフほどに長く太い針に握りをつけたようなもの。男は長い経験から斬るよりも鋭いもので突き刺す方が殺しに向いているとの結論に達し、独特の針剣とでもいうべき得物を試行錯誤の末作り上げた。なんとも使い勝手のよいものである。男は独自に「突き」の概念を作り上げていた。

男はこれから命を奪う少女を眺めた。

美しい どこか張り詰めたような緊張感が謎めいた神秘的な魅力となつている。そのまま成長すればいずれ大輪の名花となつたであろう少女。王族に生まれ大事に育てられた その運命をいま自分か摘み取るのだ。

男は音も無く物陰を移動した。

少女の斜め後に陣取つた男は妙な違和感を覚えた。だが、その正体に気づく間も無く突きかかる。白いものがひるがえつた。それは持っていた白い布だったのか、それともドレスの裾か。硬質の音がした。

突きをかかわされた刺客はたたらを踏んで 驚愕した。手に馴染

んだ武器だ。刃こぼれひとつしても見なくてもわかる。だからこそ男は信じられない思いで自らの手元　武器に視線を落とした。刃の根元のあたりから切り取られた針剣を。

「ば……かな……」

振り返った男はそこに風変わりな刃物を構えるドレス姿の剣士を見た。そして違和感の正体に気づく　背が高いのだ。男よりも少しばかり高い。なによりもその眼。刺客を睨みつける鋭い眼差しは少女のものではない。刃物を構えただけで姿かたちは変わっていないのに、そこにいるのは確かに男　少年だった。身代わり　贖物だ。

「そこまでだ。大人しく降参しな」

聖堂の出入り口に新手が来ていた　否　最初から畏だったのだ。

もつとも手強いと教えられていたディアボロとその副官。さらに女装した剣士に囲まれては降参するしかないだろう。

男は床に刺さった自分の得物の刃の部分に視線を落とした。それを断ち切ったのは剣士のようだが　ぞつとした。金属を斬るとは

それを成したのは見たことも無い刃物だった。片方にしか刃がなくわずかに反っている。白っぽいそれは何でできているのかはよくわからない。その先は尖り　男は「突く」という技が己のものだけではなく、さらに自分よりも上があったことを知った。その形状は男の針剣よりも「突く」ということに向いているだろう。

（こんな剣士がいるなんて聞いてないぞ）

これだけの手誰なら知られていても不思議ではないが、剣士の剣術も剣もまったく未知のものだった。

陽月祭の巫女に選ばれたものは一時期陽月聖堂にこもらなければならぬ。そのときは聖堂の中は無人とする。もし巫女を害しようとするものがいれば、絶好の機会と捕らえるだろう。

「とは思っていたのですが、そのとおりになりましたね」

ナリスがこぼすその横を縛られた刺客が引つ立てられていく。

「これで大丈夫かしら？」

「あれは下っ端だろう。実際に動くものなんざ、どこまで知っているやら」

「無理でしょうね。まあ手駒を減らしたという程度でしょう。どこまで手繰れるかが問題ですよ」

「じゃあ、意味無いの？ まだ巫女やセラフィナが狙われるの？」

「それでも対処していくしかありませんね」

「残念ね……ところで、大丈夫なの？ そのおこもりしなくて」

事情に疎い椿が聞いた。今回本当の巫女はランカだ。本来ならランカがおこもりをするところなのだが、それでは身代わりがばれるということ暗殺者をおびき出す罠に使ってみたが、支障が無いのか椿には判断できない。

「はい。当日突然巫女が変わることもありました。政情の関係で取りやめになったこともあります。それでも支障が出たことはありません。形式だけですよ」

「形式ね、ならいいわ。それにしても……」

椿はいまの自分と同じ格好をしている兄を見た。大和と椿は二卵性双生児だが顔立ち瓜二つだ。それでもふだんは性差からくる違いがあるが、それは化粧で上手くごまかされ黙って立っていれば麗しい淑女だ。顔立ちほぼ同じでも大和はどちらかといえば大人びて神秘的な雰囲気さえある。

思わず見惚れた椿だった。

「美しいわ、兄さん」

ひくつと大和の頬が引きつった。その秀麗な顔に見る見る血の気が上がる。頬を染め細かく震えるさまはなんとも色気があった。

そもそも椿を囮にすることを「そんな危険な真似はさせられない」と最後まで反対したのは大和である。二人が入れ替わることでやっと了承したのだが、椿付きの侍女にあれやこれやと着飾らせられた自分の姿は思いのほか精神的なダメージがあったようである。

誰が見ても美しい。

大和の男としての何かが大きく傷ついた。

「ツバキ嬢も可愛いですよ。可憐というか」

「ありがとうございます」

ナリスが誉めてくれて椿は少しばかり嬉しかった。同じ顔立ち、同じ衣装でも椿がすると可憐になる。中身もしくは表情だけでこうも違うかと椿は感心した。

「確かに別嬪さんだよなあ、二人とも。しかしおんなじ顔なのにこうも趣が違うもんかねえ」

「上手く化けましたね。なんというか、化粧というものはこうも威力があるのかと」

ディアボロとウィルまでもがいうと大和がベールごと鬘をむしりとった。

「二度とやらないぞ!!」

短い言葉だが、万感の思いがこもっていた。

13 二度とやらないぞ！(後書き)

模様替えの傍ら少しずつ書いてました。やっと更新です。遅くなり
ました。

14 様々な思惑

人気の無い部屋で男は報告を受けていた。

「手の者が戻りません。巫女のおこもりも終わつたとのことでございます」

「つまり、しくじつたということか。手の者は死んだのか？ それとも」

「しかとはわかりません。しかし、囚われたとしてもあなた様にはたどり着けません。あれの知る根城もとうに引き払いました」

実際に手を下すものには限定した情報しか渡してはいない。依頼主にたどり着くことはありえないのだと保証した。

「しかし絶好の機会を逃したな」

これほどの好機はもう無いのではないかと問う依頼主に男は弁解した。

「最悪でも陽月祭当日詠を捧げる直前に殺せばよいではありませんか。目的は『陽月祭の妨害』でございます。手段と目的を違えてはいけません」

「そうであつたな」

男の狙いはロディシア王家の権威失墜だ。

ロディシアは不可侵の国。それに手を出すことは許されない。過去に侵略を試みた国家が無いわけではないが、他国がロディシアにつきたちまちのうちに返り討ちにあう。ロディシアは自国だけでなく他国の軍隊にも守られていた。

また反乱も一度もおきていない。家臣は王家に（多少の不正を働くこともあるが）逆らうことなく仕えている。

それもこれも『魔界から世界を救っている国』『王家の血を持つ姫が詠を捧げなければ魔界と繋がる』と思われているからだ。

男はそれを信じていなかった。

なにかのまやかして世界中がロディシアに騙されているのだと信

じて疑わない。だからこそこの世界における最大の禁忌『陽月祭の妨害』を企てている。ロデイシアの権威が崩れれば　ロデイシアに手を出してもどこからも非難はこない。むしろよってたかってロデイシアを食い荒らすだろう。

ロデイシアにはそれだけの旨味があるのだ。

ロデイシアの権威を失墜させ、自分が利益を得る。男の思惑は突き詰めればそういうものだった　男の手足となり働くことを約束した男にはまた別の思惑があるのだろうが、それはどうでもいいことだった。

注文した品々のできはロジニアを満足させるものだった。これらを愛娘がまとったときの姿を想像し、ロジニアはにやけっぱなしだった。

「これはいい。ランカにはよく似合うだろう」

巫女やセラフィナの衣装は白と決まっているが、形は決まっていない。フリルやレースで飾られた衣装は花嫁衣裳のような華やかさだ。それを飾る真珠や水晶の装飾品も品位がある。

「わたくしどもが扱う品の中でも最上級品でございます。失礼ですが、これ以上のものはないかと」

他国とも取引のある商人が最上級の愛想を見せていた。もっとも品に見合うだけのお値段をもらっているだけに愛想もよくなるだろうというものだ。

「お嬢様の美しさには巫女さまもかすんでしましましょう」

だからこれはほんのお世辞だった。

本来の巫女はこの国の王女だ。王女ともなればそれこそどんな豪華なものが出てくるかわからない。ましてその麗しさは知れ渡っている姫君だ。

いくらなんでも太刀打ちできないだろう、と心の中で思っていたとしても。

「巫女、巫女か」

「ロジニアは相好を崩した。」

「これは巫女の衣装としてふさわしいものだな」

「はい。巫女の衣装としてもふさわしいかと感じます」

召喚陣を壊して王女を呼び戻せなくした責任を取らされて謹慎させられていたロジニアだが、やっと謹慎が解かれ久々の登城であった。問題をひた隠しにしているだけに陽月祭のセラフィナをつとめる姫の親が謹慎中というのはよけいな詮索を生みかねないという理由である。

ロジニアがホクホクとした顔で廊下を歩いていると偶然顔見知りと出くわした。

「これはこれはロジニア公、御無沙汰とて降ります。よいことでもありましたかな。ずいぶんと機嫌がよろしいようですが」

それなりに身分の高い男であるから、ロジニア公も無視はできない。

「御無沙汰しておりましたな。城は久しぶりですので。わかりますかな？ 陽月祭の衣装が届きましたな、できればえに満足しておりますですよ」

「噂になっておりましたよ。大奮発したそうですね」

「それはもう。娘の晴れ舞台ですからな。恥ずかしい格好はさせられません」

「それは楽しみですね」

話をあわせつつも、男には巫女のおまけであるセラフィナごとくがいくら着飾ろうとこっけいなだけだという嘲りがある。それを表に出さないだけだ。

「それはもう。一生に一度あるかないかのことですからな」

ロジニア公の言葉に男はふと不審を抱いた 一生に一度？

すでにランカは一度セラフィナとして舞台に立っている。そしてこれからもセラフィナとして舞台に立つだろう。次の巫女候補たちが育つまでは。そしてまだリリー王女とランカ姫以降に王族の血をひ

く姫は生まれていない。

その発言はあきからにおかしかったのである。

「名誉なことですからな」

「本当に」

14 様々な思惑（後書き）

プチ更新です。短くてすみません。

今回は伏線はりなんです。一話にすると長すぎて二話に分けると短いつて感じなんです。とりあえず主人公サイド以外のところでは

あれ？ 主人公って誰？

15 妄想と老婆心……なのだろうか？

取調べははかばかしくなかった。

捕らえた暗殺者は口が堅く、魔法に対する抗魔法がかけられていた。口を割らせるのは早々に諦め、抗魔法の解除を進めているとか。わかったこともある。

「捕まったのは魔人でした」

「魔人？ そんなのもいるのか」

「ファンタジーの世界だと大和は思った。」

「亜人種（人に近いが人ではない）のひとつだ。祖先が魔界から来たと信じている種族だな」

「そうなんですか？」

「ディアボロとウィルが複雑な顔をした。」

「そういう言い伝えがあるというだけだ」

「疑わしいところですよ。あちらの世界の生物はこちらの世界では長く生きていけないはずですから」

大和にとっては初耳だ。

「ごくたまに力の弱い巫女さまだったりすると、結界をとじるのに時間がかかることがあるそうで、あいた穴からあちらの生物が紛れ込むことがあります。そういうのを捕獲または駆除するために兵を配します」

捕獲した生物は魔法使いの下に運ばれ調べられるのだが、長く生きてきたものはいないという。こちらとあちらでは空気自体が違うのだという。あちらの大気は瘴気はこちらの生物には毒であり、あちらの生物にとってはなくてはならないものだという。生命力が強いためには死なないがひと月持たないそうだ。そんなものが定住し子孫を残せるのかといえば 疑わしい。

「ですので、祖先があちらから来たというのは 妄想である可能性のほうが高いかと」

それゆえに魔界との道を繋げようとしている最有力候補だとか。

「まあ、今頃行っても根城は空っぽだろうな」

「典型的な使い捨てですね」

捨て鉢なディアボロとウィルの口調にも大和は怒らなかつた。たぶん口を割らない自信があつたからこそ、件の暗殺者があつさり投降したのだとわかつているからだ。

「それより内通者の割り出しだな」

「怪しいのは数人に絞れましたね。それがどこ繋がつているかという点は押さえていますから、もう少して判明すると思います」

ここら辺の事情は大和にはよくわからない。いくつかの共通点があるものという程度だ。

“ リリー王女が行方不明であることを知らないもの ” “ ツバキ嬢が身代わりをしていることを知らないもの ” で “ それなりの財力があるもの ” “ 現状に不満のあるもの ” “ おかしな動きをするもの ” “ 警備のものに過剰な支配力を持つもの ” “ リリー（ツバキ）王女の行動（表向きには伏せられている）を知ることができるもの ” などの条件で絞られてくるらしい。

この国の貴族階級はよく知らないが。

「ばれている可能性は？」

大和が尋ねるとディアボロが即答した。

「ない」

「餌に食いついてきましたからね。ランカ姫の近辺に異常はなし。まだ気づかれていません」

ウィルが補足した。ランカ姫にも極秘で監視がついているらしい。椿が贖物とわかれば真つ先に唯一のセラフィナであるランカが狙われる。その兆候は無く、まだ身代わりは知られていないと判断できる。

それはまだ椿が狙われ続けるというありがたくない事態ではあつた。

「……そういえば、椿は和刀をもつてきてくれたり、文房具で商売

をしているようですが、名が知られば正体も知られる可能性があります
ります どう思われていますか？」

再び上司二人が複雑な顔をした。

「あゝツバキ嬢……ね」

言い難そうにディアボロが頬をかいた。無言でウイルに目配せす
る。ウイルが頬を引きつらせた。

「……身代わりはばれていないが……ヤマトの双子の妹と認識され
ている。顔はまだ知れ渡ってはいないが異国のものを伝えている才
女と噂されているな」

「……………あいつはいつたいなにをしているんですか？」

ディアボロが眼をそらした。

「隊長？」

「よくわからんが、ナリス殿と色々やっているらしい」

助け舟を出したのはウイルだった。

「……………なにをやっているんだ（お兄ちゃんは色々心配だよ）…

……………」

15 妄想と老婆心……なのだろうか？（後書き）

前回載せ損ねた残りです。ブチ更新で申し訳ないです。伏線ハリハリ

16 ある意味錬金術

それは奇異なものだった。

一言で言ってしまうえば箱。またはひく動物のいない荷車？

蒸気を立てて走るそれを驚愕して見詰め、走り去ると思わず眼をそらすのだった。

それは王宮の中庭を走っていた。

ふと、背後から迫る音に大和は振り返り、慌てて眼をそらした。

それはこの世界にあつてはならないものに似ていた。この世界にエンジンはない。まだ発明されていないか、あるいは誰も思いつかないか。ありとあらゆる発明は天才と呼ばれる人間が閃き、作り出される。一度世に出れば様々な工夫により洗練され改良される

大和の世界ではごくありふれたものになりつつあるが、この世界にはないはずだ。

だが あるはずのないものがここにある心当たりはある。

大和につられて振り返ったディアポロとウイルの顎がかくんと下がった。

「な、なんだありゃあ……」

「荷車？ 馬車？ それにしてはひく動物がいませんが……」

二人は不審な行動をとる大和に気づいた。

「あれ、知っているのか？」

「心当たりがあるようですね」

「たぶん……自動車」

大和の知っているものとずいぶん形が違うが、記録映像や映画などで出てくる初期のころの車に類似していた。オープンカーもどき。そして、そういうものを作りたがっている人物も知っていた。

「自走する車？」

(つーばーきーいいいい)

「兄さん」

自動車もどきの中からゴーグルをかけた椿が手を振った。その隣でハンドルを握っているのはナリスだろう。

自動車もどきは大和のそばで止まった。

「どお？ この車」

顔はベールで隠されているが声が浮かれていた。

「椿（あれほどあっちの世界の技術は持ち込むと言ったのに、これはなんだ）！」

四人乗りなのだろうか。四つの座席が内部にある。屋根はなく、木や金属を組み合わせて作ってあるようだ。後部に蒸気機関ではないかと思われる大きなものがくっついていてる。

「この世界初の蒸気機関を利用した車よ」

「この世界に公害を持ち込むつもりか！」

ガソリンエンジンではないようだが、蒸気機関も立派に公害を生み出すのである。蒸気の利用した機関はものを燃やしその熱で蒸気を作る。かつて蒸気機関車が一般的で合った時代煙害が起きているのだ。蒸気機関車は大量に石炭を必要とし煤を生産しまくった。「甘いわね、兄さん。この世界には魔法という便利なものがあるのよ……」

「精霊石というものがありました。まあ、熱を発するとか、水を呼ぶとか簡単なものですが、それを利用してみました」

ゴーグルを上げたナリスが満面の笑みで応えた。

つまり蒸気を作るのにものを燃やす必要はなく、煤も発生しないというわけだ。ある意味エコ。

「ねっねっ凄いでしょ！！ これは試作機だけど、もっと工夫すれば蒸気に変換しなくとも発動機関が作れるかもしれないわ」

「そのとおりです。小さな魔法で大きな効果！！ いや、機械文明とは素晴らしいものですね」

ナリスも興奮しているのか声が上ずっている。

ここにいたって大和は己の失敗を悟った。

魔法使いとは魔法が使える人間のことだが、探究者でもある。そんな人間に異界の叡智などというものを目の前にぶら下げれば飛びつかないはずがない。

椿とナリス。この二人に好き勝手にさせていたのは失敗だった。

この二ヶ月程度であることが科学と魔法が交じり合い新たななにかを生み出しつつあるようだ。

これは錬金術とでも言うのではないだろうか。

「なにをやっているんだ、おまえは」

「わたしの長年の夢よ！ それに、兄さんのためでもあるわ」

「？ どういうことだ」

「兄さん、原付の免許取ったでしょ」

「ああ」

十六になると大和はすぐに原付バイクの免許を取った。それがどうしたというのか。

「兄さん乗馬できないでしょう」

「……ああ」

元の世界では乗馬などしたこともない。

「この世界の乗り物って馬が主流なんですって。それに変わる足を作ろうと思っているのよ（精霊力利用バイク）」

確かに大和には乗馬はできない。しかし、この世界でやっていくにはいずれ覚える必要があるだろう。とはいえ、すぐには覚えられないはずだ。

気持ちありがたいのだが、影響が大きすぎる。蒸気機関は船などにも応用できたはずだ。発展していけばこの世界の常識が変わる。この妹は技術革命を起こす気だろうか？

「まだなにかやってないだろうか？」

椿が微妙に視線をそらした。

「……なにをした」

「……この世界には蒸留酒が無かったんだって」

「作ったのか！」

そういえば昔、手製の蒸留釜で父親の葡萄酒をブランデーに蒸留してしまったことがあったのを大和は思い出した。

「だって、些細な実験よ」

「この世界を捻じ曲げるな！ 俺たちの世界の文明を持ち込むんじゃない！ ある意味オーパーツだぞ！」

だが、酒という単語を耳にして大和の隣にいたディアボロは顔を緩めた。

「火で温めて湯気にしたものをまた冷やした酒ってなんだ？ 旨いのか」

口にした言葉は最初は意識される。

「あちらの世界では酒をそうやってまた別の酒にするそうです」

「……蒸留酒というんだ」

「ジヨウリユウシュ……旨いのか？」

ディアボロの瞳が輝いていた。

ナリスが微笑んで言う。

「分かりません」

「おい……」

「わたくし、酒類は強くないのです。この方法で造った酒は非常に強いらしいので、呑めません。強い方にぜひ試飲して欲しいと思います」

ふっとディアボロが笑った。

「つまり俺に試して欲しいと、そういうわけだな」

「はい。他に酒を取り扱っている方々にも試飲していただく予定です。よろしければ車に乗ってください」

「分かった。おう、後は頼む」

「……仕方ありませんね」

酒が絡めばなにを言っても無駄だとわかっているウィルは溜息をついた。

ディアボロは世界初の精霊力併用蒸気機関の車に乗った。

「いいのか？ この世界には無いはずの酒だぞ」

「ははははは、些細なことだ。旨い酒なら大歓迎だぞ。旨い酒に国境も異世界もあるものか！ 異世界の知識、どんと来いだ！」

ディアボロが豪快に笑った。

「酒ごときで懐柔されるな！」

「酒をバカにするものは、酒に泣くんだぞ」

「意味がわからんわ！」

それって泣き上戸？ 大和はディアボロを説得することを諦めた。

「ヤマトさまもどうぞ」

「ああ」

一行を乗せた車は魔法と科学を合成した錬金術師の塔となりつつあるナリスの塔に向かった。

ちなみに車の乗り心地は

「素晴らしい！ これほど早いとは！」

「おーすげー、俺も動かしてみてえな」

「サスペンションを考えるべきだったわ。ラリー仕様とか」

「……………酔う」

三者三様であった。当たり前だが道は舗装されていないのである。

16 ある意味錬金術（後書き）

王宮の庭内部です。かなり広いんで車が走れます。大和が車に弱いのではなく、道がガタガタです。舗装された道ではないので（笑）4Dにするべきですね。

17 王様の酒

とりあえず普通に吞まれている酒を集め、種類ごとに片っ端から蒸留したそうだ。

三種類の酒が形の違う杯にそれぞれそがれた。

立ち上る芳香にディアボロがうっとりとした顔をする。

「こいつは旨そうだ」

酒類の製造販売を生業としている杜氏や商人も数名よばれていたが、新しい酒に興味津々といった様子だ。

「ぜひ味をご覧になってみてください。かなり強い酒ですのでお気をつけて」

「おう」

ナリスに促され、ディアボロは杯をひとつ取り、口をつけた。ナリスがいったとおり強い　が

「旨い！　旨いぞ！　こんな酒は初めてだ」

「この酒はどのような製法をもちいたのですか？　こんな酒は見た事が無い」

「わたしも様々な酒を扱っておりますが、これは……存じません」

商人や杜氏が騒ぎ、ディアボロは三種類の酒を一通り味見した。

「いかがですか？」

「おかわり！」

ぐいっとカラになった杯を突き出すディアボロだった。

「お気に召したようで」

「おう、こいつはいい！　もういっぱいいくれ。ていうか、全種類瓶ごとくれ」

「そこまで呑むとひっくり返るわよ。それにそんなにたくさんは作ってないわ」

あくまで試作段階なのだそうだ。

蒸留酒を造るには、大量の原酒がいる。そこまでは作るつもりも

なかつたようだ。

「それは残念ですな。よろしければ、ぜひうちにも扱わせて欲しい
ものですが」

商人が残念そうに言う。

もつとも蒸留という技術を使ったことは教えておらず、商人や杜
氏には『新しい酒』としか伝えていない。故に仕込んでいないと
つたのだが。

「そんなにおいしい？」

「強い酒ですので、普通のものには好かれないかもしれませんが、
通や酒飲みにはたまらん一杯ですな」

「あゝストレートなものね。ウイスキーとかは割ったりして呑むの
が普通だし」

「ワルとは？」

「混ぜ物ね。水で薄めたり、氷を入れたり、炭酸水や果汁とか。コ
ーラはさすがにないか……」

「詳しくお聞きしてもよろしいですか？」

商人は商売になりそうなおいを嗅ぎ取ったようだった。

「ごめんなさい。よく知らないの」
未成年の椿は元の世界では飲酒の習慣はない。一般的な常識しか
しらない。

「これほど好評なら陛下に献上してみましようか？」

ナリスが提案すると椿は首をかしげた。

「よろこぶかしら？ 王様でしょ。ふだんからいいお酒呑んでるん
じゃないの？」

自分では飲めないだけに酒に対する評価は著しく低い。

「いや、こんな酒はない。絶対よろこばれる。だからもういっぱい
「しかたありませんね」

ナリスが空の杯に酒を満たした。上機嫌で口をつけるディアボロ
だった。

「隊長呑みすぎ」

これはもう今日は使い物にならないと心の中で呟き、酒のにおいに辟易する大和だった。大和自身は未成年なのでのまない。

この後、漬れたディアボロを宿舎に運ぶため隊員が呼び出されたのは面子に関わるので内緒だ。

「これがディアボロを漬したという異国の酒か」

「正しくは製法を再現したものです」

献上された蒸留酒は三種類あり、それぞれ一瓶ずつが王の前におかれている。

「本来ならばらく寝かせるそうですが、時間がありませんので出来立てをお持ちしました」

「……どれ、味見してみるか」

王は小姓に杯につぐように命じた。専用だという小さなガラスの杯につがれた酒を王は様々な角度から見詰め匂いを楽しんだ。

「このような色合いの酒は初めてだな」

「陛下、お毒見仕ります」

初老の将が進み出た。王が口にするものは毒見されて当然だが、ものがものだけに小姓にはさせられない。ゆえに将である男が名乗り出たのだが、酒豪で知られた男だった。

「自分が呑みたいだけであろうが。ナリスのもってくるものに毒が入っているはずもない。フォルトに杯を」

いわれたとおり老将に杯が渡された。

「強い酒ですのでお気をつけください」

フォルトは立ち上る芳香に眼を細めると杯に口をつける。今はまだ無色のそれがみるみる減っていく。ナリスが悲鳴のような警告を發した。

「ああ、いつてる端から！ そのように呑むものではありません！」

水でも呑むように杯を干した老将は相好を崩した。

「これはまた、なんともいえませぬな」

「全部呑みおったな、こやつは」

顔をしかめた王は新たな一杯をついでもらい念願の味見をした。
少し舐めて

「うむ、強い。どうやってこれだけ強い酒を造ったのだ？ うむ、
これは、いい」

機嫌をなおして少しづつ喉に通す。

「蒸留という技術を使いました。ツバキ嬢がいうには、異国では一
般的なものだとか。ブランデー、ウイスキー、焼酎、と様々な種類
があるようですが、これはこちらの酒を同じように蒸留したもので
ございます。本来ならより香りをつけるために樽で寝かせるのだと
いつておりました」

「そこにあるのはまた別の蒸留酒かの？ よしよし、わしが毒見を「
「フォルト、自分が呑みたいだけであろうが。しかたないのう。開
けてみよ」

別の瓶が開けられ毒見が行われた。

「ですから、水のように一気に呑まないでください！ 潰れますよ
！」

一通り王の味見が終わった。

「これでもまだ未完成だと申すのだな」

少々酒が回ったのか王が上機嫌でいう。老將軍は食い入るような
熱いまなざしを残りの瓶にそそいでいる。

「はい。そのようなお話でした」

「これから研究するということが」

「あ、いえ、好奇心から異国の技術を模倣してみただけでありませ
し、原料となる酒がまたバカにならない量で。とりあえずここまで
ということになっております」

「それはもつたいない！ これだけの酒を！」
酒豪で知られる老將が悲鳴のように叫んだ。その非難の眼差しが
もつと造れと言っている。

「……………領地を授ける。直轄地であつたラフォニだ。そのかわり

この技術は門外不出とせよ」

突然の命にナリスはひっくり返りそうになった。

「へ、陛下、突然なにを……」

「授けるとおっしゃられても誰に」

「ふむ、これを造ったのはツバキ嬢であったな。しかし、突然婦女子に領地を授けるとあらぬ疑いが経つかも知れぬか……カンナギ家ということにしておけ」

ラフォニは王の直轄地のひとつであった。さほど大きくはないが気候も穏やかで、作物の出来がよい。そして酒造においても名を馳せている。

「領地やるから、蒸留酒造れってわけ？」

「だと思えます」

「……大昔にはお酒の製造法を隠すため教会で造ってたって話があるけど……困ったわね。ものが大きすぎるわ」

「領地経営などできないぞ」

大和が眉間にしわを寄せる。

「いままで運営していた人をそのまま残してくれるそうです。給金はこちらで出さなければなりません、利益は丸ごと入るので、問題ありません」

突然ふってわいた“領地”に大和と椿は少し困った。カンナギ家にくれるものだから椿だけでなく大和にも責任がある。カンナギ家はいわば豪族の仲間入りしたようなものだ。

「困ったわねー。そんなに期待されちゃってるの？ とりあえず、お酒に関するものは翻訳をすすめるけど、わたしにできることって少ないわよ」

「杜氏や酒作りに携わっているものと考えさせましょう。できることなので、何とかなるでしょう」

こうして二人は望まずして領地を持つてしまった。ある意味自活への一歩である。

こうして三種類の蒸留酒の研究が始まり、できた酒はそれぞれ『
王様の酒』、『巫女姫の酒』、『カンナギの酒』の名で知られ大陸の酒
飲みの垂涎の的となるのだが、それはまた別の話である。

17 王様の酒（後書き）

領地もらっちゃいました。

二人が帰った後は直轄地に戻るでしょう。それまでには蒸留酒のノウハウが得られるだろうという王様のお考え。

そこまでして酒が呑みたいのか（笑）

覚えなくてもいい豆知識。

ワインなどのアルコール分は13%くらい。それに対してブランデー、ウイスキーなどの蒸留酒は約三倍からそれ以上。物によっては四十%オーバー（43くらい）です。生の蒸留酒をワインのつもりでカパカパ呑んだらそれはひっくり返るわな。

「もらったといっても、酒を造らせるといふことが大事なようで。技術は門外不出。できたものは一度国で買い上げ、そこから商人におろすそうです」

「つまり、あの酒が出回るかも知れんのだな」

ふってわいたカンナギ家の領地について大和は興味津々の隊一同に説明していた。ディアボロの意見はそんなものだった。

「身分は？ 爵位は授かるのか？」

ウィルは幾分冷静だった。

「いえ、爵位とかは。一ヶ月ですから」

事情を知るものはそれが転送陣が完成するまでの時間だと知っている。大和と椿はいわば事故でこちらの世界にやってきてしまったのだ。リリー王女の召喚陣と同時に大和と椿を送り返すための陣も作られている。完成と同時に二人は帰るだろうと思っていた。

知らないものは二人は異国から留学で着ていると思っている。一ヶ月で異国に帰るのだと判断した。

「そうか、ヤマトはあと一ヶ月で国に帰るのか。領地はどうするんだ」

アルバが名残惜しそうにいう。最初に色々あったがヤマトをのぞくと一番の新入りであるアルバは何かとヤマトとくまされていた。

他国人が領地を持つということはめずらしいがまったくくないわけではない。そういう場合代わりに仕切ってくれる代官を雇ってすえ、そこから上がる利益を受け取ることが多い。

「帰るときに返還するんじゃないかな？ それまでに造れってことだろう」

家にといいことだが、実質もらったのは椿である。自分にはなんの権利もないと大和は思っている。

もったいないと惜しむ同僚に、収益などとりに来られないほど遠

くだとつけ加えた。なにせ次元を隔てた異世界なのだ。帰ればだが。

「残り一ヶ月で完成するのか？」

「研究はナリスさんが引き継ぐでしょう。それにあそこまでできていたら後は熟成させるだけなので」

「そうか……楽しみだな」

ディアボロが空を見上げた。その眼にはまだ見ぬ完成された蒸留酒がうつっているに違いない。

「というか、隊長を潰すなんて、どんな酒なんですか？」

「……………よくわかりませんが、確か元のワインがアルコール分十三%くらいですが、それから作ったブランデーは約三倍からそれ以上……………ものによつては四十%くらいだったはずだ。一気飲みなんかするから潰れる」

蒸留酒より弱い酒でも一気飲みのせいで急性アルコール中毒になる場合がある。急激なアルコール摂取は避けるべきなのだ。ワインを飲みなれたとしてもブランデーを同じように水のように呑めば酔いつぶれるだろう。むしろあの程度で済んだことが奇跡だ。

「……………ばあせんと？ ……よくわからんが、ものすごく強い酒ってことか。あるんだ、そんな酒」

アルバが恐れ戦いた。

「おお、ものすげえ旨かった。売り出されたら大枚はたいてでも買っちまうだろうなあ」

空を見上げるディアボロの眼には 以下略。どこか遠くへ行つてしまった隊長の関心を地上へ引き戻すためにも大和は今朝聞いたなんでもない情報を教えることにした。

「……………後で一部の人に祭で振舞うそうです」

「よし、野朗ども、警備を怠るな！ 祭を成功させようぜ！」

高速で地上に戻ってきた隊長は突然使命に目覚めたようだった。異論のない隊員達は素直に雄叫びを上げた。

手触りのよい絹のドレスは輝かんばかりの純白だった。布で作られた造花があちこちにバランスよく縫い付けられレースとともに清純な美しさと可憐さを引き立てている。流した黒髪に透けるような紗のベールと生花が飾り立てられる。

薄く化粧をされた椿は自分の姿に満足した。

「どう？ お姫様っぽい」

椿が振り返って尋ねるとシリアは最大級の笑顔を見せた。

「大変お似合いですわ。髪をつけただけですが、リリーさまがそこにいらっしやるようですわ」

もともとこの衣装はリリーのために用意されていたものだ。代わりに椿が着ることになってしまったので、慌てて仮縫いからやり直したが、リリー本人のようによく似合っている。偶然とはいえよくもここまで似通った容姿の娘が召喚されたものだ。

椿がかすかな苦笑をもらした。

「お父さんにもよくお母さんに似てきたって言われたわ」

ロディアの首都は隅々まで飾り立てられた。露店が並び、人手を見込んだ芸人が芸を見せている。人々は晴れ着を着込み、どこからか音楽が流れる。

ロディアは小さな国ではない。魔界との道を封印する使命を持った王族をいただく国だ。豊かな山林と農地、良港を有する海もある。裕福な国だけに四年に一度の祭りにぎやかだ。

他国からも招待された王侯貴族だけではなく、観光や商売を目的に人が来る。

祭の舞台は神殿に作られ、貴人との区別はつけられるが平民も見ることが出来る。

身分を持たない人用の席は前日からすでに陣取り合戦が始まっているとのこと。警備がいるためつかみ合いや暴力にまではまだ発展していない。敷き布の上に人が陣取りその仲間らしき人が回りの店で買い込んだ食べ物や飲み物を運んでいるらしい。

身分ある人々の席はすでに用意されているため時間までは空いて

いるだろう。

途中の道は巫女姫の姿を一目見ようとする人でごった返している。ふだんの警吏では足りず一部の軍や騎士団も警備にあたっている。

賢者の塔をせずしずと降りてきた巫女姫はパレードのための馬車に乗り込むときこっそりと呟いた。

「茶番劇の始まりね」

他国の貴族の中には招かれなくとも自ら訪れると断りをいれて祭に来るものもいる。新興国のイデアの侯爵であるリアンガもその一人だった。予め書状で伝えてあるのでリアンガ侯爵の席も用意されているはずだった。故に慌てる必要はない　　が、知人が尋ねてくるのは都合が悪い。

だが、それを無視して急遽訪問してきたのは、ある目的を同じとするこの国の伯爵という身分を持つ同士だった。まさか無視するわけにもいかずリアンガは客を通させた。

貴族的な整った容貌を持つすまし屋の男がいかにも急いできたといわんばかりに取り乱している。

「どうしました？　あなたともあるう人が」

「人払いを。あのことについて重大なことがわかりました」

リアンガはわずかに眉をひそめると、召使たちを下がらせた。

「なにかありましたかな？」

「あの姫は贖物だ」

トールス伯爵が息を切らせながら報告した。

「なんですと！」

「リリー姫は五ヶ月前の襲撃のさい、行方不明になっていたのだ。ロジニア公がやたらと豪華なものを用意させるから不審に思い、調べさせた。王女のためのドレスを直させていた。その針子から聞き出した。おそらく、あの姫は別人なのだ」

「……なるほど。囿ですか。よく知らせてくれました。すぐに手の者に伝えましょう。今から間に合うかどうか」

やられた、とリアンガは思った。

すでに手配は終わっている。指令が間に合わなければ、罠の贖物に引っかかる。協力者に目標の変更を伝え、さらに実行者に話が行くまでにどれだけかかるものか。

リアンガはトールスを返し、自身は不自然なほど急いで逗留先の屋敷を飛び出した。

18 出陣（後書き）

というわけで、黒幕様？ ラスボスではなく、情報漏洩の内通者と資金提供者ですえ。ドレスのサイズを直したのが発覚の原因です。

お酒については……番外編でやるべきか、本編に組み込むべきか？
迷ってます。

ランカの衣装は豪華なものだった。セラフィナや巫女の衣装は白ときまつているが、形や装飾でずいぶん華やかになるものだ。それはランカによく似合っていた。

純白の薔薇のようだ。

「美しいですわ、ランカ姫」

「リリーさまこそ、美しいですわ。父がなにやら張り切って……セラフィナがここまで華美ですと恥ずかしいかぎりですわ」

本物の巫女はランカだ。華美に飾り付けられようとそれが正しい。本人がそのことを知らないだけだ。

「ランカ姫にはふさわしいと思いますわ」

華やかに二人の姫は微笑をかわした。

トルースは急いで屋敷に帰りたかったが、祭の最中では人が多すぎて馬車の速度をあまり上げるわけにもいかずなかで焦りを感じていた。そもそもトルースがこの企みにのつたのも王族の血を優先させる国の気質に不満があつたのだ。

王家の血をひいてさえいればロジニアのごとき俗物でも重く用いられる。その理由が『巫女』あるいは『セラフィナ』だ。王に巫女をつとめられる姫がいればいいが、そうでなければ王族の血筋から巫女を探す。巫女を輩出させるため血筋は保護される。

それが気に食わない。

そもそもロジニアのごとき俗物を重用されるのは『王家の血筋が特別』と思われているからだ。その根底が覆されれば 自分達も重用されるだろう

そのためだけにトルースはこの企てにのつたのだ。

苛立ちを抱えやっと屋敷についた と思ったとき、御者が声をかけてきた。

「だ、旦那様、お屋敷の回りに兵隊が……」

「なんだと」

すぐに制止の聲がかけられた。トルースは仕方なく馬車を止めさせる。馬車の戸が開けられ

「トルース伯爵ですな」

見覚えのある騎士が確認を取った。

「なんだね、君は。なんの用があるのだね？ わたしは陽月祭に参加しなければならぬのだよ。これから準備をしなくては」

「その陽月祭のある大事な日に、どこへお出かけでしたかな？」

「君には関係ない」

やられたか とトルースは悟った。

見張られていたのだ。恐らくは針子だ。それに接触してくるものに気をつけていたに違いない。いつからか、どこまで知られたかはわからない。だが、相手はこちらが動くのを待っていたのだ。

「アイデアのリアンガ侯爵にもお話を聞くことにして いつから内通していたかしゃべってもらいますよ。この売国奴が」

内通者 売国奴 国の威信がかかっている祭 儀式を邪魔するということは、すなわち国を貶めること。母国を他国に売り渡すも同じ。

覚悟していたはずなのに、その言葉はトルースを打ちのめした。

「わ、わたしは間違っただけだ！ わたしのしたことは正しいのだ！」

「自国の王女を殺し、国の威信に傷をつけることがか？ 王位継承者の暗殺未遂、ならびに反逆罪で連行します」

反逆罪 ならば助かる道はない。どういい逃げようとしても

いや、最初から分かっていたことだ。ロジニアに対する敵意を利用された。唆されて自国の第一王位継承者を売り渡そうとした。それは反逆に他ならない。たった一人のために国を危機に晒すなど本末転倒もいいところだ 正しくなどない。

トルースは肩を落とした。

「わたしはなんとということ……」

リアンガが逗留先の屋敷に帰ってきたとき、物陰に隠れていた兵士が馬車を取り囲んだ。それが騎士でなければ物取りかと思うほどの手際だった。

「アイデアのリアンガ侯爵ですな」

「わしを他国の侯爵と知つてのことか？ ロデイシアは戦争がしたいのかな」

「懇意にしておられるトルース伯爵ともどもご招待するだけです。

抵抗なさらないように」

ぐつとリアンガは息を飲んだ。

すでにトルースは勾留されているだろう。だからこそ名前を出した。やつが我が身かわいさに情報を提供することは間違いない。自身は助からないにしても家門に及ぶ累を少しでも軽くするためだ。

他国のそれも『魔界から世界を救っている国』ロデイシアの王位継承者であり、その要である『巫女』の暗殺を企んだとしたら、アイデアのほうが他国から一斉に非難され、それを口実に戦端を開く国もでてくるだろう。

それをかわすためアイデアはリアンガを切り捨てだろう。全てを一人に押し付けて知らぬ存ぜぬで押し通す。

それしか国が助かる道はない。だが

「もう遅い。偽りの宝石はすでに知れた。真実の水晶は叩き割られる」

「なに？」

華々しいパレードは麗しい二人の姫君を披露して神殿に到着した。二人の姫君はいずれも美しくパレードを見に来た人々の目を楽しませた。二つの純白の華。まさに眼福だ。

騎士のエスコートで生きた華は優雅に馬車から降りる。会場の裏手に回って出番を待つのだ。

何人もの人間が死に物狂いで整えた会場は満員で、その主役たる巫女の登場を今か今かと待ち望んでいる。

ロディシアの至宝たる巫女。その歌声が世界を救うのを一目見ようと。

亜麻色の髪の少女が巫女の衣装をまとった姫君に飲み物を渡そうというのか、杯の乗った盆をもつて近づき 警備の兵士に腕を掴まれた。

「なにをなさいます」

「お前こそ、なにをしようとした？」

「巫女さまに飲み物を」

「どちらに、だ？」

「も、もちろん、あちらのお姫様に」

少女の答えを聞いてディアボロはにやりと笑った。

「きまりだな」

ディアボロは少女の腕を掴んだまま片手で吊り上げる。

「きゃあ」

少女は悲鳴を上げるが、落ちた盆の下から刃物が出てきた。

「くっ！」

少女が何かをする前にディアボロは鳩尾を叩いて失神させた。あつけなく小さな体は力をなくした。

「証人だ。得物を取り上げて自害しないよう牢に放り込んでおけ」

「なにごとですの」

悲鳴を上げるランカの隣でリリーが自らの髪をひっぱった。長い髪はずりりと下に落ち背の半ばほどの髪がそのしたから現れた
椿が鬘をとったのだ。

「ご心配なく。刺客を捕らえただけですわ。巫女姫」

椿は席を離れ大和の元に行く。

「あなたは リリー様ではないわね。誰なの？」

にっこりと椿は笑った。

「改めてご挨拶させていただきますわ、巫女姫。わたしは椿。こち

らふうつに言えばツバキ・カンナギかしら？ ヤマト・カンナギの双子の妹よ」

そうして並ぶと性別と表情の違いはあるものの顔立ちがよく似ていることは明白だった。

「どういうこと？ リリー様のふりをしていたの？」

「ええ、そう。王様の依頼で」

「陛下の？」

呆然としたランカに椿は説明した。

「五ヶ月前、リリー王女さまは刺客の手から逃れるために転送陣を使ったそうです。運悪く転送陣は壊され、どことも知れない場所に転送されてしまいました。それを呼び戻すための陣をあなたのお父様が勝手に動かして壊してしまいました。そのとき呼ばれたのがわたし達二人なんです」

「お父様が……」

「巫女の資格を持つ姫君はあなた一人。刺客の目をごまかすためリリー王女のふりをして欲しいといわれました。でも、もう終わりですわ。刺客は捕らえられ、もう式典も始まります。わたしの役目はここまで。ここからの主役はあなたですわ、ランカ姫」

リリーとは違う、それでも魅力的な微笑みで椿は言った。

「どうぞランカ姫、あなたが巫女だ」

ディアボロがカーテンをめくり促した。

「わたくしが……」

突然のことにランカの足が震えた。戸惑った視線をあたりに彷徨わせる。

椿が笑った。

「あのお約束はまだ有効かしら？ リリー王女ではなく、ただのツバキ・カンナギの招待を受けていただけける？」

ランカが笑い返した。

「ええ、一緒にお茶を楽しみましょう」

ランカは顔をあげて舞台に出た。

ロディシアの巫女姫として。

巫女の登場を待つ群衆の前で、麗しい純白の衣装をまとった姫君が舞台へ進み出た。歓声が響き、人々が手を叩く。

だが 一人の男が舞台に駆け上がった。

「覚悟！」

そして白刃が閃いた

歓声は悲鳴に変わった。

19 茶番劇(後書き)

案外あっさり書きすぎましたかね？

というわけでそろそろクライマックス近いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3091o/>

身代わりとりっぷ

2011年10月19日11時37分発行